

42024

教科書文庫

4
810.
41-1924
20000 48004

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

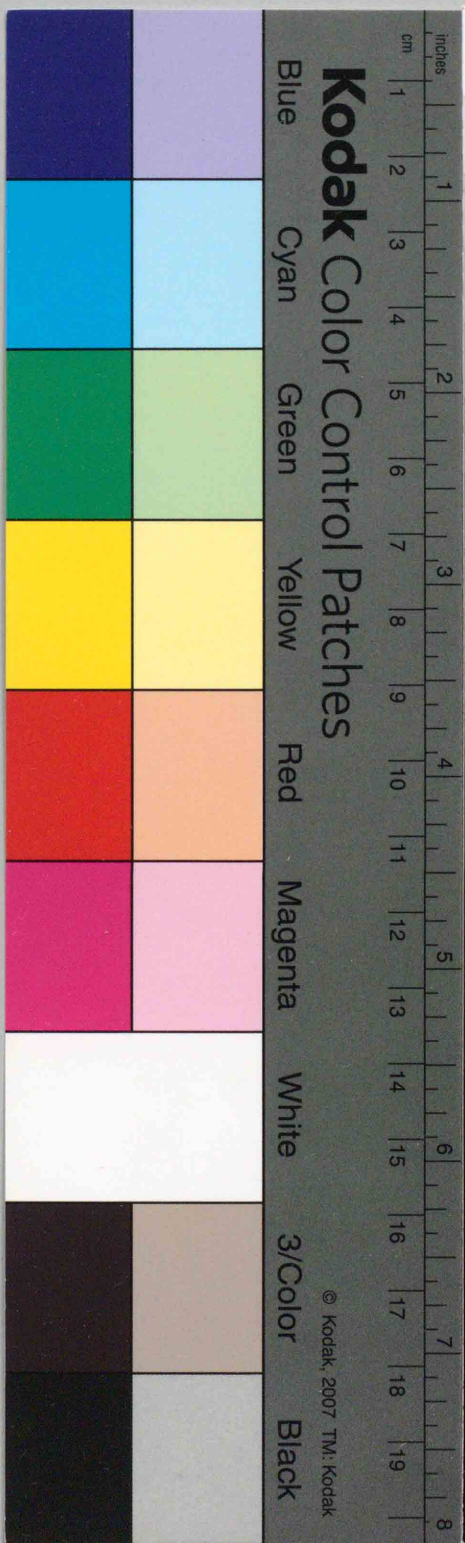


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Shi13
資料室

中等國語概說

清水芳德編

全

清水芳徳編



中等國語概説

東京 合資 六盟館
會社

編纂の趣意

一、國語科の教授に於ては言語文章の理解力を長ぜしめ、文學上の趣味を養ひ兼ねて知徳の啓發に資することの緊要なるは論を俟たず。されど國語國文に關する系統ある知識を養ひよつて以て國語國文を愛重する念を涵養することは更に一層重要なり。

二、現今の中等學校に於ける國語科は、その講讀する所、時代的に、形式的に、内容的に、多種多様に互りて眞に生徒の讀書力を長養するに遺憾なしと雖も、生徒をしてわが國語國文に關する系統ある知識を得しむるには聊かあきたらざるものあり。

三、本書はこの必要を充たさんとし、この缺陷を補はんがため、上級用副讀本として編纂せるものなり。

大正十三年十月

編者識

中等國語概説

目次

二

内篇目次

(一) わが國語國文……………一

(二) 國文學史概説……………五

(三) 日本漢文學史概説……………四〇

(四) 國學史概説……………五三

(五) 國語沿革概説……………六五

(六) 日本書道概説……………七九

(七) 國字概説……………九二

(八) 現代の國語問題……………九七

外篇目次

(一) 上古文例……………一〇一

一、大祓詞の一節(祝詞)……………一〇一

二、祈年祭詞(祝詞)……………一〇二

三、文武天皇即位の詔(宣命)……………一〇三

四、天孫降臨(古事記)……………一〇四

五、倭建命(古事記)……………一〇

六、意宇郡(出雲風土記)……………一一二

七、上古の歌(萬葉集)……………一一三

(二) 中古文例……………一一六

一、交野の狩(伊勢物語)……………一一六

二、藤のかげ(伊勢物語)……………一一七

三、月の都(竹取物語)……………一一八

四、みやこいり(土佐日記)……………一二〇

目次

三



中等國語概説

内篇

(一) わが國語國文

(日下部重太郎氏の所説による)

清水芳徳編

敷島のやまとの國は言靈のたすくる國ぞまさきくありこそ
歌聖人麿が此の一首は傳説的に深く我が國語を尊重させる心を起させ
てきたものであるが、今や吾等は、わが帝國が世界の大国と並び立つてゐる
大御代に生存する幸を得て、ますます我が國語國文の榮を願ふ情が涌き來
るのである。

(一) わが國語國文

目次

五、小柴垣(源氏物語).....	一三二
六、須磨のわびずまひ(源氏物語).....	一三四
七、翁丸(枕草紙).....	一三六
八、うつくしき物(枕草紙).....	一二九
九、源氏物語(更科日記).....	一三〇
十、法成寺の造營(榮花物語).....	一三一
十一、藤原隆家(大鏡).....	一三四

附録

- 一、國文學史一覽表
- 二、勅撰和歌集一覽表
- 三、國學者系統表
- 四、儒家程朱學派系統表
- 五、儒家諸學派系統表

目次終

さて國語が國家の體面、勢力、實益と國民の品性、思想、趣味との上に大關係のあることは、今更に言ふまでもない。試みに我が同盟國の英國を見よ。その海軍、その航海業、その商工業のみならず、その言語文學は世界に大勢力を持つて居る。たゞその言語文學の勢力だけを觀ても、英國の大を感ぜざるを得ぬではないか。

嘗て或所で、偶然支那の留學生と行き合つたことがある。彼等は日本語を話し、日本服を着け、日本料理をたべて居た。自分は暫くは彼等が支那人であることに氣づかなかつた。彼等は我が國の大家が書いた漢文學の額を見て、「これも支那のおかげだ」とさゝやいた。そのさゝやきを聽いて、自分は夥しい感想を起した。彼等は日本人に賞美されて居る自國の古文學を眼前に見て、その祖國民が外國民に及ぼしたる勢力を自覺し、直ちに自尊心を起し來つたのである。これは尤もの事。歐米の好事家が日本服を着てゐるのを見てさへも、何となく吾等は好い心持がする。況んや一國の大家の精神に刻まれた

祖國の文物の勢力を觀れば、實に多大の自尊心を起すべき筈である。顧みるに、我が國に支那の古文學を傳へたのは隨分ふるい事であるに、その古文學は偉大な勢力を我が國に存續して、わが國の文學にも大なる影響を與へて居る。吾等は言語文學の影響が強大で長久であることを認め、かつ正直に、いはゆる「おかげ」を謝せざるを得ぬ。

凡そ自國語を尊ぶことは、何人も主觀的に然らざるを得ぬ。自國語を尊ばないものは、愛國者でない。更に又之を客觀的に見ても、我が國語も世界に於て重んずべき資格を持つて居ることが認められる。

世界の諸語族の中で最も重なるものは、印度語や西洋諸國語などの屬する印度歐羅巴語族、支那語や安南語や暹羅語などの屬する印度支那語族、及び我が國語などが屬するといふウラルアルタイ語族であらう。ウラルアルタイ語族は、我が日本列島、朝鮮、滿洲、蒙古、シベリヤ、中央亞細亞から、飛びはなれて歐羅巴のトルコ、フィンランド、ハンガリーにまで擴がつて居る。この語族

中で、特に我が國語には、**祝詞**や**古事記**や**萬葉集**の様に、立派な文學が上古から現はれてゐる。さうして、中古、近古、近世の間に於て**物語**・**三鏡**・**戰記**・**謡曲**・**淨瑠璃**・**小説**・**和歌**・**俳諧**などの文學が榮えてゐて、文學のにぎやかなこと、世界何れの國に對しても遜色はあるまい。我が古今の文學は、世界に優れた支那、印度及び西洋の三大文明を吸収し、之を日本思想に融和させてこゝに日本文學を成すものである。我が國語は、語格が整つてよく思想の發表に適し、曲尾語たる西洋諸國語に對して、立派に漆着語の優れた代表者である。この國語を日々用ひてゐる人々は、内地人ばかりでも實に六千萬、即ち世界總人口の凡そ三十分の一以上といふべき大數である。

吾等は斯様に我が國語の尊ぶべき資格を認めると同時に、ますます之を愛護することを怠つてはならぬ。

(二)國文學史概説

(芳賀矢一氏の所説による)

一、緒言

埃及・アッシリヤの古文明は、石に刻みたる象形楔形の文字によりて、考古學者の研究に委せらるゝのみ。雅典の市羅馬の都、其の彫像や、其の殿堂や、人をして徒らに興亡變遷の迅速なるを嗟歎せしむ。支那の歴代は二十四朝革命に踵ぐに革命を以てせり。獨り我が大日本國、上に萬世一系の帝室を戴き、下に千古不易の臣民あり。金甌無缺の歴史を有して、眞に宇内の最舊邦と稱すべし。建國以來の連綿たる文學史を語り得る吾人は、亦幸なるかな。

二、上古

敬神崇祖の民族が、皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の歴史を語り、祖先の勳業をしのび、よりにて以て團結せるは即ち我が建國の體裁なり。此の時未だ文字あらず、必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありて、此の祭祀に伴ひしならむ。今尙延喜式中に保存せられたる祝詞は、即ち其の面影を止むるものといふべし。

そもく祝詞は、天皇即ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩、國民の幸福を求むるを主眼とす。祈年祭、神嘗祭、廣瀨大忌祭、龍田風神祭、いづれも年穀の豐饒ならんことを祈るものにして、大殿祭、御門祭、鎮火祭等は、天皇の宮殿玉體に異變なく、安穩長久にましませとの祈なり。朝廷のみならず、朝廷に仕へ奉る百官人も亦恙なく繁榮して、奉公し奉れと祈るなり。大祓詞は、上下の人の一切の罪惡を祓ひ清むる祭にして、かくして年々に心を清淨にし、その身を洗滌して、公に仕へ私を慎む。現在の福祉を求め、現世の生活を樂しむ國民の氣風は、皆祝詞の中に認むべく、支那、印度の文明の

感化未だあらはれざる敬神崇祖の上代思想は、能く祝詞の中に表彰せられたりといふべし。其の文や單純にして變化少きを以て、却つて純朴簡古の風あり。自ら莊重森嚴の感を與ふ。

上代の國民は、此の民族共通の文辭たる祝詞の外に、亦單純なる抒情歌を有したりき。記紀の二書を始めとして、古風土記等に萬葉假名を以て記載せられたるもの即ち是なり。いづれも内容は簡單にして、僅かに直覺的情緒を述べたるに過ぎずと雖も、自然に對する憧憬最も深く、枕詞譬喩を用ひ、自然の推移を見ては直ちに人事を聯想し、人事の消長を見ては直ちに自然を想起し、人事と自然と全く融合せるは、早く後世和歌の通有性を發揮せるものといふべく、風光秀麗なる山河の間に生育せられし我が國民の上古文學としては、當然の傾向なりといふべし。五七交錯の句形も未だ一定せず、句數も亦種々なりと雖も、五句三十一文字の短歌形の後世に流行すべき傾向は、早く既に認められざるにあらず。

三韓を経て輸入し來れる支那文明は、推古朝以後は直接に彼土より傳來する事となれり。萬葉集の和歌が其の形式に於て、間接直接に支那文學の影響を蒙れるは當然の結果といはざるべからず。

萬葉集は、短歌四千四百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌二十八首の大歌集たり。其の中最も著るしきは、柿本人麿等の歌ひ出せる長歌なりとす。柿本人麿、山邊赤人等は、純粹なる國民精神を歌へること多けれども、山上憶良に至りては、儒教、佛教等の思想を詠出せるもの多し。要するに支那文化の影響を受けたる一般文運の進歩は、一方に於て純國文學の發達を促したるに外ならず。但し萬葉集中には、讀人不知の歌多し。多くは古來人口に膾炙せし歌什許りを集めたるものにして、眞に國民の聲といふべく、是等は支那文化の影響の外にあるを以て、却つて其の趣味の津々たるを覺ゆ。

古事記・**風土記**の文は純國文として見るべく、又續日本紀中に記される**宣命**の文は、祝詞と相對して同じく神聖莊嚴の古文たり。古事記・風土記

は舊來の傳説を敍したれば、或は奈良朝以前の用語、句法をも存したるべきか。宣命の文は莊嚴なれども、祝詞の如き簡古の趣なし。間、儒佛の語を加へたるのみならず、思想に於ても其の影響自ら揭焉たるものあり。是等は皆實用の文字にして、國民の感情を歌へる散文は、尙發達し得ざりしなり。

三、中 古

平安朝に至りて、平假名の使用始めて自由となれり。是に於て韻文としての和歌、散文としての物語は、互に相前後して著るしき發達をなし、我が模範文學を大成せしむることを得たり。而して和歌の發達と之に對する翫賞とは、其の他の文學の根柢をなしたるが如し。當時の朝臣は専ら支那の詞賦を學習せしが、和歌は古來の純國民的文學として亦相伴ひて行はれしのみならず、女子は専ら和歌を弄べり。故に長歌は早く衰へたれども、短歌は世を逐うて愈、其の流行を持續し、延喜の朝に至り、始めて**和歌の勅撰集**を見たり。

之を **古今和歌集** とす。主として萬葉集以後の短歌及び當時の歌人の篇什を集めたり。萬葉の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を直敘せるもの多きに反し、古今のは俯仰感懷、人生の無常を敘し、浮世の夢に似たるを説き、六朝思想と佛教思想との短歌中に移植せられたるかの觀あり。故に萬葉は敘景の歌に富み、古今には理窟の歌多し。修辭上の進歩亦著るしく、譬喩、縁語、掛詞等最も巧妙に使用せらる。奈良朝と平安朝との國語の變遷は、亦其の歌調の相違を感じしむること尠からず。萬葉は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今は巧緻の境に進みて勁健の義を失へり。是亦時代の反映と見るべし。自然と人事との融合は此の時代に至りて全く完成し、春花秋葉、雪月の美歌に詠ずべき題目も一定し、春の鶯、夏の郭公、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴ふ鳥獸までも自ら定まりて、春の花盛りには人生の樂しき朝を思ひ、萩の上に置く露には儚なく消ゆる運命を悲しむ等、和歌の約束は悉く確立して、後の文學は皆之に則るに至れり。古今集以後の撰集には、**後撰集**・**拾遺集**あり、**相**

並べて **三代集** と稱す。又爾後の **後拾遺**・**金葉**・**詞花**・**千載**・**新古今集** と併せて **八代集** と稱せり。

國民の和歌に對する嗜好は、古來の名歌に附するに種々の物語を以てす。萬葉集卷十六の有由緒歌、伊勢物語、大和物語の如き、實は歌を主とせる種々の説話を集めたるものなり。余は之を名づけて **歌物語** といふ。是等歌物語は歌によりて説話を臚列し、人事の境遇を述べたるものなるが、そを一身の經歷に繋がんか、即ち **日記** となり、若し之を綜合して種々の人物を假りて脚色を施さんか、即ち **物語** となる。

日記には **蜻蛉日記** を最も舊きものとして、**和泉式部日記**・**紫式部日記** 等あり。物語には **宇津保物語**・**落窪物語**・**源氏物語**・**狭衣物語** 等を最も著名なるものとし、名のみ傳はりて、今日に亡びたるもの頗る多し。男子が主として支那詞賦の模作に力めたる間に、女流の手によりて、純國文學の發生は成就せられしなり。

源氏物語 五十四帖、前篇は藤氏ならぬ人の母に生れたる一世源氏を主人公として、其の戀愛の成功を敘し、後篇の**宇治十帖**は表面上源氏の子にして實はあらぬ薫大將を主人公として、其の戀愛の失敗を敘述す。全篇貫通の脚色整然紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性の性格は明瞭に發揮せられ、歌物語の敘述せる種々の戀愛の境遇は集めて大成せられたる觀あり。宮中に出入し、年中行事に参加し、虚榮と富貴とにあこがれし上流の摺紳貴女は、最もあらはに描寫せられたり。源氏の大作たる所以は、亦其の自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には、必ず自然の背景を添ふ。即ち和歌の趣味の上に立ちたるものにして、地の文には、處として和歌の景情を含まざるなし。人事と自然とを融合せる詩的思想は、こゝに至りて最大の發達をなせるものといふべし。其の文冗長にして詳細、上古文の簡朴にして莊重なる點は見るべからずといへども、嫺々として風に靡く女郎花の如く、柔艷麗正に其の内容に恰當せり。こは平安朝女流文學一般の上にも言ひ

得べき事とす。

源氏物語と相並びて雙璧と稱へらる、**枕草子**は古來**隨筆**の嚆矢と稱せらる。然り、隨筆なり、歌人として自然と人事とを觀察せる隨筆なり。其の着眼の奇警なる、其の句法の輕妙と相待ちて千古不朽の文辭を成せり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、變化錯綜の妙味は句法の上にも内容の上にも之を認め得べく、歌人が一つの題詠に際して、右往左往に詩想を馳するの概あるを見る。其の自己の經歷を敘するや、全くかの日記の文に均し。故に此の隨筆も、亦歌物語を根據として發達し來れる平安文學の例には漏れざるなり。此の時代初期の歌物語は、一變して日記となり、**小説物語**となりたるが、再變しては**歴史物語**となれり。これ實に當然の推移といふべし。歴史物語には、**榮華物語**と**大鏡**とあり。何れも藤原氏の歴史を敘して道長の全盛時代を寫せり。大鏡が先づ帝王の本紀を掲げ、次に攝關の列傳を掲げしが如きは、全く支那の紀傳體の歴史の體裁を襲へるなり。

是等歴史物語の外に、各種の奇談珍話を類聚せる**今昔物語**あり。文學の書といはんよりも、**傳説**を集めたる書なり。

四、近古

平安朝の小説物語は一變して歴史物語となりたるが、此の時代に入りて更に轉じて**軍記物語**となりたり。前者は年中行事の平和を記し、後者は修羅争奪の戦争を記せり。彼の葛藤は人情の弱點より來れる墮落にして、此の波瀾は戦亂の爲の愛別離苦なり。彼の主人公の宿世は自ら招ける所、此の主人公の運命は時世之をして然らしめたるなり。前者の主人公は感情よく意思を支配する能はず、後者の主人公は意思よく感情を支配す。讀者は前者に於て情緒の活動に同情し、後者に於て情緒の抑壓に同情す。全體の境遇より言へば、前者は富貴榮華にして羨むべきもの多く、後者は轆轤落魄悲しむべきもの多し。一は樂天的、一は厭世的、其の對照はよく平安時代と鎌倉時代とを

反映せるものといふべく、鎌倉文學に此の好資料を與へたるものは、保元・平治以來、源平二氏の轉變迅速なりし運命の歴史、即ち是なり。**保元物語**・**平治物語**・**平家物語**・**源平盛衰記**

等即ち其の尤なるものにして、武人の戰場に於ける武勇を寫し出せるのみならず、亦其の常人としての情愛をも寫し、戦袍匆忙の裡、尙詩歌音樂の風流を棄てず、武士のなさは全篇を通じて活躍す。而して一貫するに道德節義を以てして、感化の力頗る大なり。國民の有する**最大敘事詩**として弘く國民に愛讀せられ、永く後世の文學に影響せる、因由なきに非ず。其の語彙文體が、漸く男子の漢文と女子の假名文とを合同して、剛健なる要素と優麗なる分子とを調和し得たるは、恰も其の内容に於て武士の武勇節義と情緒風流との兩方面を表示し得たるが如く、共に外來の文化と國民本來の特質との一層相融合せる近古時代を反映せるに外ならず。

此の時代に於ては、文學は著るしく教訓的と成り來れり。軍記物語中に於て人の興亡盛衰を敘するや、必ず内外典の語を引き、天竺震旦の例を援いて

之を證明し、又各種の技能藝術に於ても、往々何等かの由來變遷を説き、學究的講釋を交ふ。是を以て、談動もすれば岐路に入るを免れず。是一般の社會が無學にして、少數の知識あるもの、益、術學的となれる當時の情態を示すものに非ずして何ぞ。あらゆる藝能は皆世襲となり、一技一藝悉く祕事祕訣を傳ふるに及びて、尙古の嗜は靡然風を成し、一切の事物に益、煩瑣なる儀式を尊び、其の緣起由來を重んずるに至れり。武人は學ばず、學問あるものは僧侶のみ。然れども僧侶は朝儀に暗し、儒佛を兼修せる僧侶が、一方に於て社會の耳目となり、朝儀典禮に明るき公家が、一方に於て有職故實の淵源と仰がれたるは自然の勢といふべし。故に教訓的文學の兩極端を擧ぐれば、一方に於て佛家の **法話** あり、一方に於て公家の **歌學** あり。

何事の模範も花の如き平安朝時代に在り。況んや和歌は朝廷と其の緣故最も深し、日本固有の文學として萬世悠遠の朝廷と其の起原を等しうせる感あるが上に、延喜以來の勅撰集は益、朝廷と密接の關係を生ぜしめ、朝廷の

政權を失ひたる後は、敷島の道は唯歌道と思惟せらるゝに至れり。而してすべての藝能に行はれたる知識の專賣は亦斯道にも及べるを以て、和歌の師範家は奕世和歌に關する知識の本源として目せられ、いよゝゝ煩瑣なる法則を以て和歌の用語、思想をも束縛するに至れり。かくの如くにして、如何でか其の發達を望むべき。鎌倉の初めの新古今集は、當時名匠多く、歌風清新、古今集の理窟の歌に反して、敘景の歌多く、句法も亦變化して觀るべきもの尠からざれども、**新勅撰・續後撰** 以下彌下りて彌衰へ、勅撰集は積んで二十一代集を數ふれども、文學として新氣運に關係せるところあるを見ず。かの公家の位階高くして四民の上に居り、しかも無能無力、衣冠束帶の風貌の外は何等活動の元氣なかりしと同様、古法を墨守し、古式を蹈襲し、全く社會の外に超然たる觀あり。其の本歌取と稱して、古人の句を換骨奪胎する手際を貴びしは、たまゝ、其の獨創の力なきを證し、又當時の尙古の風を示せるに外ならず。當時の散文が、古人の句を引證點綴せるものと其の精神全く相同じ。

梵讚・和讚より今様歌の發達し來れるは、一般文學の上に混和し來れる佛教の勢力の韻文の上に及びたるを證するものにして、連歌の發達は一面に於て窮屈なる和歌の法式を脱して遊戯三昧に入り、又其の無味單純を離れて、用語題目の範圍を擴張せるものといふべし。連歌は一人の作に非ずして、五十句百句を連ぬるも、尙全體としては何等の意味を成すものに非ず。篇中幾多變化の妙あるを尙ぶ。忽ちにして春、忽ちにして秋、忽ちにして人事、忽ちにして風景、何物かの連鎖によりて、千種萬様の事件を前後續出せしむるなり。

當時の隨筆たる徒然草を見よ。古代を思念するの情は到る處に吐露せられたり。有職故實の講釋、極めて煩瑣なる知識も亦貴びて記載せられたり。訓誠と説法とは所在是あらざるなし。大體としては厭世の氣風に富む。之を平安朝の枕草子に比較すれば、其の差異頗る顯著なり。これ其の作者の境遇の異なるが爲のみならずして、實は時代の烙印の異なればなり。

平安朝文學に倣ひて作れるもの、土佐日記に對しては十六夜日記あり。大鏡に對しては水鏡あり、増鏡あり。今昔物語に對しては宇治拾遺物語あり、十訓抄あり、古今著聞集あり。文體に於て倣ひ得たるものあり、構造脚色に於て倣ひ得たるものあり。然れども其の厭世的分子多き、教訓的分子多き、いづれも時代の産物たるを失はず。歴史の書として神皇正統記の如き、其の文體、其の思想、明かに時代を證せり。紀行文の東關紀行・海道記に於ても亦然り。然れども、人若し近古時代を以て全く獨創なく、發達なかりし時代と思はざらば、大なる誤ならん。近古時代に於て、文學上最著明の事件は、敘事詩の次第に戲曲化せられて、いはゆる劇詩の發達を見たる事なりとす。即ち能樂に伴ふ章曲として、謡曲及び狂言の發達せること是なり。能樂は古來の舞樂に本づきて、佛教より發達せる聲樂を加味し、一種の總合美術として發達せるものにして、謡曲は亦當時の文學の粹を集めて之を集大成せる觀あり。國民敘事詩として久しく民衆間に傳誦せられし軍記物語は、勿論歌人の金科玉

條とせし伊勢物語・大和物語・源氏物語等の敘事物語は、皆採りて戯曲化せられたり。僧家の學も公家の學も、皆等しく其の中に收められたり。故に佛教の説教あり、有職の講釋あり。文章は、詩歌・朗詠・今様の區別なく、古人の妙句・佳章を十分に攝取補綴して、苟も何等かの縁あれば、必ずしも其の思想敘述の矛盾し、撞着するを厭はず。當時一般の文學の趣味、やがてかの連歌的趣味と稱すべきものは、能く其の上に發揮せられたり。しかも掛詞を用ひてにをはを省き、其の文體を緊縮して、成るべく短き間に、成るべく多くの語句・事實を連接して趣味多からしめたる修辭上の技巧としては、一進歩を見たりといふを得べし。

謠曲が幾多の英雄傳説・歌人傳説を材料とせるに對して、狂言は各種の童話的材料を以て其の章曲を成し、彼が古文・古句の補綴に力めたるに反して、此は當時の俗語を以て對話的に作成し、毫末も他の文を挿まず、純劇詩たる形式を備へたるは奇とすべし。唯彼は眞摯にして、此は滑稽、一方の悲劇的性質あるに比して、一方は喜劇的性質を帯びたる差あり。然れども謠曲の悲劇的性質ありといふも、實は佛法の解脱を骨子とするを以て、寧ろ慰安満足に終るものなれば、純悲劇的とはいふべからず。神事能の如きは國土の安穩、治世の長久を歌ひて、吉慶を賀ぐを常とす。狂言の滑稽趣味や、將に來らんとする近世時代の先驅を爲すものといはんか。

五、近世

上古の和歌に發して中古の女流物語となり、近古の軍記物語となり、更に戯曲化として謠曲と成れるは、上古より近古までの國文學變遷の大綱にして、抒情詩より敘事詩・敘事詩より劇詩となれる順路を經過し來れり。但し之を繼承し、之を完成して、あらゆる方面の發達進歩を示したるものは即ち近世文學に在り。徳川の昌平三百年は、文學の發達進歩には最も幸運なる時代なりき。

中古の國文學は宮媛より出で、近古の國文學は公家と僧徒との手に成れり。近世に入りては、學問は次第に僧徒の手を離れ、別に儒者の一階級を生じ、又儒學者に對して起れる國學者あり、孰れも地下人にして堂上人に非ず。文學草莽に墜ちて、自由研究盛に、近古時代の弊竇たりし祕事祕傳を貴ぶ風は、次第に解除せられ、官職家格にこそ上下の階級は嚴重なれ、學問の門戸は何人にも開放せられ、知識の堂奥は何人の登昇をも拒まざるに至れり。茲に於て争うて新説を鼓吹し、強ちに師説に泥まず、獨斷的方法を棄て、學術的研究の態度を取るに至りしかば、一般學術の進歩大いに見るべきものあり。純文學も亦之に伴ひて其の發達をなせり。印刷術の進歩が、其の背後の大勢力たりしは言を待たず。

徳川幕府は儒教を獎勵して、武士の修養に資し、經史に通ずるものを爲政家として登庸せり。是に於て文教大いに興り、碩學鴻儒相踵いで世に出でたり。是等儒學者の假名を交へて筆述せる所謂 和漢混淆文 は、即ち法を漢文に

採り、漢語及び漢文訓讀の法を國文に加入せるものにして、即ち今の 普通文 の基礎を成せり。貝原益軒、新井白石、荻生徂徠、室鳩巢等、或は隨筆に或は論說に、若しくは紀行に若しくは傳記に記す所同じからず、文體一樣ならざれども、平易暢達、概ね近體文の模範となすに足る。

漢學者が支那の古文明に憧憬するに慊焉ならず、日本自から日本の道ありと稱して、學問・文章に日本の長所を發揮せんとしたるものは、國學者なり。漢學者が漢文を作爲せるが如く、國學者は、中古以上の純國語を以て文を綴り、歌を賦し、只管我が國の古代を理想とす。賀茂眞淵、本居宣長、村田春海、橋千蔭等、苟も古學派の流を酌めるものにして、國學者を以て自ら任ぜるものは、法制制度の専門家たると、言語・文法の學者たるとを論ぜず、必ず雅文を作り、和歌を賦し得ざるものなし。國學者はかくして、漢學者の漢文・漢詩に對抗したれども、其の 擬古文 と稱するもの、句章の排列・引喩の方法等、實は知らず識らず當時の漢文に負ふ所尠からず。

和歌に於ても、亦徳川時代に於ては一革新を見るを得たり。いはれなき祕事祕傳の束縛は、早くも地下國學者の嘲笑する所となり、學術的論斷の前には論抗する能はず。地下の國學者は何等の師範を受けず、束縛を蒙らずして、自由に詠歌をすさびとせり。其の初めは堂上家に學びし京都の地下人中にも、後には出藍の才を發揮して、優に堂上家を凌ぐものあり。世下るに隨ひて、作家益多く、私集續出せり。之を近古以來の沈滞眠れるが如きに比すれば、其の懸隔如何ぞや。

雅文和歌の進歩は、近世文學史上の一大偉觀たるを失はざれども、要するに摸倣文學なり、復古文學なり。學問興隆の結果として學者の間に起れる文學にして、一般庶民の文學に非ず。堂上の文學は地下に委し、僧侶の學問は俗人に移りたれども、文教は尙士流以上に限られたり。然るに都市の發達、財貨の増殖に伴ひ、平民社會の勃興は、隱然として其の勢力を成し、文藝の方面に於ても、活躍せる發達を認むるに至れり。かの近古文學を繼承して更に之を

大成せる新文學は、皆此の平民社會の勃興を表彰するものならざるはなし。

俳句・川柳・狂歌・狂文より小説・淨瑠璃・脚本の類もとより教育少なく趣

味低き社會の嗜好に投ずるものとして、間、猥雜鄙陋なるもの無きに非ざれども、文學としての生命は、其の中に活動せり。

十七字の俳句は、詩形としては世界の文學中恐らくは最も短簡なるものなるべし。然れども其の詩界は和歌よりも甚だ廣大なりといふを得べし。何となれば、和歌の用語は已に古語に限られたるに、吟詠の範圍亦春花秋月、古人の題詠以上に出づる能はざれども、俳句の用語は漢語と俗語とを選ばず、古語と今語とを問はず、要は之を詩化して用ふれば可なり。又其の吟詠する主題も、必ずしも古の大宮人の見そなはしけん物には限らず、如何なる市井裏店の事物をも捕捉し來るを厭はざればなり。唯其の句形の短き、物の急所を捕へざるべからず、象徴を示さざるべからず。不言にして語り、言外に餘韻無からしめざるべからず。修辭上より見んか、冗長優美に流れ易き國語をし

て、出來得るだけ緊縮せしめたるものにして、連歌以來幾數回の陶冶を経て洗鍊せられたる句法の茲に到達せるものにして、技巧の最も進歩せるものなりといはざるべからず、然れども其の最短簡の極なる言語を以てして、多大の意味を髣髴たらしむるを得るは、和歌の約束を利用したるが爲に外ならず、古來の和歌の約束は物語となり、謠曲となり、常に吾人に親しめり、其の一語は早く吾等に向つて詩的の感を與ふ。俳句は之を利用して其の句の効果を成すことを得るなり。俳句には必ず季無かるべからず、季に於て人事と自然とを結合す。上古以來の和歌は自然と人事との融合を忘れず、其の約束は十七字の中に緊縮せられて、吾人はこゝに其の結晶物を見るに至れるなり。

俳人の吟詠するに方りて材料とする人事自然古今雅俗の別なく、縱横に其の感懷を排列して文を成せるものは即ち俳文なり。枕草子を中古歌人の主觀に映じたる隨筆文とすれば、俳文は俳人としての主觀に映じたる一切を隨筆して其の興を遣れるものといはんか。古人が一の句題を得て數百句を得るとせんに、そは皆記憶を本とし、經驗を本とし、想像再現の作用によるものとせば、此の想像再現作用の個々分立せるものは俳句を成し、同時に聯結せるものは俳文を成すといふべし。

狂文は俳文に似て非なり。俳家者流は雅俗を別たさず、階級を無視して、自ら世外に超然たる風あるを以て、一種飄逸の氣風あり。狂文の取材の古今に亘り、雅俗に跨るは相似たれども、尙稍、世俗に落ちたる觀あり。恰も其の名の如く、普通文の常規を脱し、卑俗を厭はずして、古文に言ひ得べからざる思想を古文の形によりて言現したるものなり。大體に於て古文のモヂリといふべきものなり。故に滑稽可笑を主として、超然洒脫の趣なし。其の發達の俳文に負ふ所多かりしも、疑ふべからず。

狂歌も亦和歌の流行と共に行はれたり。古歌の用語、句法を用ひて、世俗の事柄を吟詠する上に、其の滑稽を構成するなり。莊重なるべきもの、卑俗化

せられ、眞率なるべきもの、戯笑の資に供せらるゝがをかしきなり。狂歌の趣味は、和歌ありて始めて存するなり。

前句附と稱して、かねて下の十四字を定め置き、之に相應する上句十七字を作らしむるは、一種狂歌の戯なり。其の前句は遂に獨立して川柳となれり。文雅風流の士の間に行はれずして、市井間の遊戲に出で、ひたすら機智頓才を競ひたるものなりき。故に自然の景色を詠出することなくして、日常社會の人事を材料とし、其の形の短簡なるは最も譏刺に適せるを以て、遂に専ら世俗人情の弱點を譏笑するを目的とするに至れり。川柳點の穿ち即ち是なり。俳句も亦間、滑稽洒脫のものあれども、俳句は必ず自然を伴はざるべからず。川柳は自然景の聯合を要せず、鋭敏なる觀察、機警なる單語、寸鐵人を殺すの概あり。江戸子の機敏頓智と樂天洒落の性質とを反映せるものといふべし。凡そ狂歌といひ、狂文といひ、川柳といふ、皆江戸の地に發生せるものにして、以て昌平日久しき逸民のすさびを見るべきなり。

敘事詩の方面に於ては、初期に於て早く**信長記**・**太閤記**等の軍書出でしが、後**假名草子**と稱するもの流行せり。佛教儒教の教訓を含むこと多きは、近古時代の文學と相遠からず。文辭脚色尙新奇と稱すべきもの無かりしかども、中には支那の怪談傳説等を翻譯し來れるあり。小説界一般を貫通せる教訓主義と、支那小説の翻案主義とは、早く其の傾向を認め得べきものあり。碩儒多く輩出し、一般文藝の勃興せる元祿時代は、小説界に於ても西鶴を出せり。西鶴はもと俳人にして、輕妙洒落なる筆致と鋭敏犀利なる觀察とを以て、次第に淫靡に流れたる社會の半面を寫し、文辭着想共に一機軸を出せり。西鶴の作は寧ろ人生の隱微なる裏面を忌憚なく暴露したるものにして、道義のやかましき時世に、淫猥なる言辭を敢てして、毫も達慮せざるは、俳人の不羈洒落なる襟懷を見るべしといへども、要するに淫靡の語を列ねて淫靡の俗に投じ、讀者の心を挑發して其の書を汚らんとしたるに過ぎず。唯其の文辭の妙に至りては、中古文の典型に據らず、近古文の常套に陥らず、推敲精鍊

の造句に習熟せし俳人の、其の才を社會描寫の敘事文に應用せるを見る。故に其の小説も、亦全篇を通じて脚色ある小説に非ずして、幾多片々たる小話の集合に過ぎず。若し此の一小話を一句と見れば、全篇は即ち連歌の如し。西鶴の連句を見れば、人事を詠出せるもの多く、其の小説は其の連句を擴張せしに外ならざるを知る。西鶴の流を酌めるものに、自笑其碩の書ける八文字 舎本あり。世西鶴の書と併せて浮世草子といふ。多くは花柳遊里を材料として世態人情を描けるものにして、是等は皆京阪地方に發生せる文學とす。赤本といひ、黒本といひ、青本といひ、黄表紙の類片々たる遊戯文學は未だ平民文學の誇となすに足らず。洒落本の描寫精細に進めるも、不健全なる社會の一面を反映せるものにして、不健全なる作物たるに過ぎず。戯作の文字の遂に戯作に過ぎざるは、遺憾の事といふべし。

國學者中、古文を用ひて小説を作れるものあり。然れども高尚にして一般人の嗜好に遠し。支那文學を翻案することの行はれたるも、亦漢學隆盛の賜なり。一般學問の發達は、小説をや、向上せしむるに至りて、勸善懲惡を寓して歴史小説を作るに至れり。之が代表者として作物の最も多く、亦傑作多きは曲亭馬琴なり。馬琴は漢學の素養少からず、國學にも造詣あり。其の學識を以て戯作の業を事とし、支那文學を翻案し、常に武士の典型を作物の主人公とせり。健全なる小説として當時に歡迎せられ、今も尙其の讀者を失はざるも故なきに非ず。

三馬一九の輩の對話を主として滑稽を記し、又人情を描寫せる滑稽本あり。爲永一派の人情本あり。各特得の妙味ありて、文學として見れば論評の價値なきに非ず。是等はすべて江戸の文學とす。

小説よりも更に重大なる、否最も重要なる近世文學の産物として見るべきは、劇詩の方面に於ける發達なるべし。是亦文藝時代として最も着目すべき元祿の世の發展を著るしとす。芭蕉西鶴に對して、近松門左衛門は劇詩に於て新生面を開ける人なり。淨瑠璃の名は近古時代に發せるものにして、近

松以前已に許多の淨瑠璃あり。三味線樂の發達と共に益、平民社會の趣味に投じ、次第に其の進歩を見しが、門左衛門に至りて其の文辭の絢爛なると、其の脚色の新奇なるとに於て、自ら新文學を作り得たりしなり。淨瑠璃は蓋し謠曲の平民化せるものといふべく、平語以來源平時代の事蹟は謠曲となりて普及せしが、謠曲の文や平民社會の耳に遠く、其の趣向もあまりに單純に過ぎたり。淨瑠璃は更に其の結構を複雑にし新奇にし、既有的事實を種々の形式に變化せしめて詩人的技巧を施し、以て庶民の嗜好に投ぜしめたるものなり。故に近松の歴史劇に於ては、其の歴史的人物は悉く徳川時代の人物と化し去り、又其の古英雄たる風貌を棄て、平民社會の行動に近づけるものあり。茲に於て純史劇と稱すべからざるものあり。又其の地の文を有して劇中の人物の性格行動によりて、事件の進行發展を促すこと無きが故に、未だ純劇詩と稱すべからずして、尙敘事詩の性質を脱せざるもの多し。

近松は晩年に至りて、多くの世話淨瑠璃を作れり。市井間に行はれし心中

を以て義理と人情との衝突を寫し、匹夫匹婦の痴情に死せるものを詩化して讀者の同情を惹起さしむ。西洋の悲劇詩と其の歸趣を同じうするを見る。其の文章は近古文の系統を受けて、修飾遊戲に過ぎたれども、しかも卑語を厭はず、俗諺を棄てず、形式こそ古けれ、用語は新奇にして、輕妙巧緻を極めたり。然れども近松が文章の價值は、之よりも尙能く作中の人物の言語行動を寫して、其の人物の風采を想望せしめ得るに在り。是近古文學に見る能はざる所なりとす。紀海音も豊竹座の爲に執筆して、竹本座と相對立せり。竹本座の作者としては、初めに近松、その死後、竹田出雲、近松半二の徒あり。學識文章もとより門左衛門の比に非ざれども、工夫合作して舞臺上の効果を目的としたるもの多し。其の後歌舞伎に歡迎せられたるは、是等諸人の作に多し。いづれも人情を棄て、公道に就くの犠牲的精神を主眼とす。所謂義太夫節に演劇に國民を感化せる力甚だ大なりしなり。

六、明治

明治の文學は、新聞紙上の所謂續き物と稱する小説にその萌芽を發す。從來筆を政治論にのみ執りたる人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速なるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に脚色を立て、自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人之奇遇・雪中梅・經國美談等は、當時最も喧傳せられたるものなるが、未だ人情の機微に入らず、眞に文學の眞諦を得たるものといふに足らざりき。然るに坪内逍遙の新文學論を唱ふるに及び、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり。在來の戯作者系の人々もこれに呼應して立ち、新文藝は蔚然として興りぬ。

蓋し、維新以來萌し來れる歐化主義はその極に達し、その反動として國粹保存論は盛に唱道せらるゝに至り、國語教育の獎勵、古文學の研究が隆昌を極むるに至りては、新文藝の先達も皆に西洋の文學のみならず、我が國の古文學を顧みるに至れり。我が文壇の泰斗として、新篇出づる毎に、洛陽の紙價

を貴からしめたる尾崎紅葉と幸田露伴とは、ともに西鶴を學びて、その新文體を創めしものなりき。

紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遁勁の調は巧みに男兒の意氣を描きぬ。されどその題材は稍單調なりき。良久して世間はその反覆に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説・冒險小説・俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘澹たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる心理小説を歓迎し、或は光明小説・家庭小説等と、幾度か流行は變遷しつゝ、日清日露の大戦を終りぬ。

戦勝に酔ひし豪華の餘弊と、避け難き財政上の壓迫とは、我が國民が生活難の聲として青年の耳朵に響きぬ。かくて從來の文藝批評家は、漸く人生の研究に轉進し來れり。或は高山樗牛の美的生活論となり、或は綱島梁川の見神説となり、或は自然主義といひ、或は無理想無解決と呼ぶものあり。人生の暗黒面を誇張したる所謂自然派の小説は、此の間に出でぬ。而してこの混沌

たる思想界を出で、更に高く更に深き人生の眞意義を捉へんとして、倫理に、哲學に、宗教に、文藝に、秩序ある討究を重ねるに至れり。

歌道には桂園の流を汲むもの多かりしが、落合直文出づるに及びて、風雅を生命とせる月花の天地より、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。俳道には正岡子規出づるありて、天保の俗調を排して清新なる天明調を復活せしめ、更に進みて淡々たる寫實の妙趣を鼓吹し、啻に俳句のみならず、寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。この派より出で、筆を小説につけたるものに、夏目漱石あり。

この他、明治の新文藝としては、別に新體詩あり。外山博士等が新體詩抄を以て始まる。ついで、或は中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするものあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするものあり。中頃、島崎藤村が溫雅優美の調、土井晩翠が縱横跌宕の風最も世に喜ばれたり。後、新詩の格調は日に新なりと雖も、未だ雄渾偉大にして、眞に國民の詩歌と稱するに足るものなし。

更に純文藝の範圍を出で、専ら一代の文章の模範となりしものを求めるに、さきに福澤雪池、福地櫻痴、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては三宅雪嶺、徳富蘇峰、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月等あり。現代の普通文は、純文藝の著作より寧ろ此等の人々の筆致に負ふ所多きに似たり。

七、現代

(此の項吉澤氏國語教科書による)

現代の文學は、先づ評論壇の勃興に始まる。明治の末年、自然主義文藝の全盛を極めたる我が文壇は、大正の改元と共に當然一轉機を劃せざるべからざる状態にありたり。客觀的、觀照的態度を持し來れる自然派諸作家の作品は、徳田秋聲、正宗白鳥等の二三例外の名作はあれども、概してその描寫せる人生味の平板單調の境地に停滯しつゝ、ありしこととは否むべからず。

現實の人生を如實に觀察し描寫して、以て人生の客觀的意義を探らんとする態度は、その根柢に作者その人の生活に對する強烈なる要求あつて、初めて能くその描出する生活内容の豊富となり、その觀察の複雑化せられ、深刻化せらるゝものなり。而も我が國の自然派作家の多くの作品には、之を求むるを得ず。是に於てか、自然派文藝は停滯弛緩の状態に陥らざるを得ず。その不滿の念は、やがて眞の力ある **自覺的文藝** の出現を翹望するに至れり。即ち中澤臨川・片山伸・阿部次郎・武者小路實篤等、多くの青年評論家は相前後して筆を論壇に馳せ、或は生命力に對する要求を説き、或は新自我新生活の創造を主張せり。即ち彼等は實に從來の美學的文藝批評の境地より、高級なる文明批評・社會批評・倫理批評等の要素を包含せる、嚴肅なる生活批評の境地に進み出でたるなり。而して斯くの如き我が論壇の傾向は、やがて文壇と一般社會との接觸となり、或は文藝家・思想家にして、代議士の候補に立つものあり。或は田圃に居を卜して半農生活をなすものあり。或は更に進んで、同志

と共に新しき村を經營する者さへあるに至れり。かくて自然主義に代るに人道主義の名、文壇に喧傳せられ、その思潮は歐洲大戰亂の影響によりて更に具體化せられ、民主主義及び民衆藝術の提唱となれり。こゝに所謂デモクラシイの先聲をなして、一般社會殊に政治經濟方面との交渉いよゝ密接となり、或は思想問題に、或は社會問題に、雄健の筆を呵するもの多く、新聞・雜誌・諸著述に、論壇は眞に空前の盛觀を呈するに至れり。

(三) 日本漢文學史概説

(藤岡作太郎氏の所説による)

一、上 古

神功皇后征討の軍を發して、韓國を服したまひしより、かの國來貢し、爾來海外の文物を輸入すること多く、國運の進歩頗る見るべかりき。

應神天皇の十五年、百濟の阿直岐來り、翌年そのすゝめによりてかの國の博士王仁を徵す。皇子菟道稚郎子この二人に學びて、よく經義に通ず。ついで阿知使臣も來歸し、これより三人の子孫は代々文事を掌れり。かくて漢文世に行はれ、史官も設けられたれども、文教の發達は産業の如く著るしからず、公文官符の類こそ漢文を用ひたれ、世人は文筆に疎く、なほ前代の状態を繼續し、海外文物の傳播も、わが文學に影響すること少かりき。

欽明天皇の十三年、百濟の使來りて、佛教を傳ふ。ついで推古天皇の朝、聖德太子その興隆につとめ、併せて文運の進歩を計る。これまで公の海外交通は概ね韓國に限られしが、こゝに至りて始めて使節の隋に赴くあり、遣使の來往これより絶えず。學生僧侶は伴ひて支那に留學し、唐代の文藝を輸入す。この刺戟にあひて、久しく潛み居たる國民の智力は一時に發展し、制度の改革、服飾の制定、寺院の建築、美術品の製作等、百般の事物は燦然として光彩を放つに至れり。

唐代文化の輸入と共に、わが國の漢文學も勃興せり。聖德太子が蘇我馬子と計りて、はじめて編纂せられたる國史は惜むべし、燒亡して傳はらざれども、また太子の撰に成れる**十七箇條憲法**は、今に存して當時の漢文の程度を示す。漢字にて記したる**金石文**も、この時に至りて始めて見るを得べし。漢文習得せらるゝに従ひて、また**詩賦**の詠あり、わが國最初の詩は、弘文天皇及び皇弟河島皇子の御手に成れり。

文運大いに開けて、こゝに纏まりたる書籍の編纂あり。日本書記は詳悉なる漢文の國史にして、諸國の地誌なる風土記も大部分は漢文にして、古事記の如きも、意に害なきところは、漢文體に作りてこれを訓讀せしめたるものなり。祝詞・宣命等の國文を綴るにも漢字を假らざるを得ず。その他の實用の散文は概ね漢文を用ふ。従うて漢文學ますく盛にして、前代の末より詩賦を作るもの漸く多く、その作は載せて懷風藻にあり。懷風藻は、わが國詩集の始めなり。聖武天皇の頃には、吉備眞備・安倍仲麿等唐に留學し、詩文ともに、かの國の學士に比して恥づることなしと稱せらる。

二、中古

太古より維新以前までは、學問といへば第一に支那の文學・儒學を擧げたりといへども、この時代のごとく、漢文學のみ行はれしは稀なり。既に大化改新の頃より漢學は興隆の運に向ひ、爾來年を追うて盛なりしが、嵯峨天皇は

殊に漢文學を獎勵し給へり。その頃京都の大學、地方の國學の外に、名門貴紳の私學を設けて一族の子弟を教育するもの多し。教ふるところ、經書・律令・算術等もあれども、唐代の學風を受けて専ら詩文を重んじ、學者のうち文章博士の位置最も高し。勅によりて編成せられし詩集には、凌雲集・文華秀麗集・經國集あり。いづれも弘仁前後の詩を集む。平城・嵯峨・淳和三帝みな詩を詠じ、殊に嵯峨天皇は才藻に富みたまふ。天皇と共に漢文學の興隆に力ありし人には、僧空海あり。空海は教界一派の祖たると共に、また文學の恩人なり。その唐に留學するや、佛教研修のかたはら、詩文を學び、歸朝の際には、かの國の有名なる詩文集を携へ歸りぬ。空海の詩文を集めたるものに性靈集あり。その詩文を論じたる書を文鏡秘府論といふ。わが國の漢文學は蓋しこれより蔚然として興れるなり。小野篁また詩才に富みたりき。

清和天皇以來、また詩文に名ある人少からざりしが、就中菅原道眞が平易暢達なる辭を以て悲慘なる實境を詠じたる詩は、今に國民の同情を惹くこ

と篤し。されどこの頃より大江菅原の二家は文學界に於ける門閥の位置を占め、階級の固定は漸くその道を不振ならしめたり。

當時の詩人が愛誦したるは六朝より唐代にかけての詩文にして、**文選**・**白氏文集**殊に重んぜらる。これ等が社會と文學との上に影響せしことは甚だ大なり。浮華驕奢、四時の遊觀の盛なるが如き、一はこれが爲なるべく、わが國の詩家歌人が取りたる題目も、彼に得たるもの多し。綴るところの文辭は四六駢儷體を旨とし、語句の配置に苦心して眞情の流露を忘れ、纖麗の態を喜び、漢文學はこれより衰微の運に向へり。

平將門の亂を起してより以來天下漸く治まり難く、奥羽の役、保元・平治の亂相踵いで起り、學問の事殆ど爲すべからず。且つ所謂武門武士なるもの威力を肆にして、一般に講武の事は盛なれども、研文の事は輕んぜられたり。一時甚だ盛にして、**本朝文粹**・**六國史** 其の他法典書等、漢文に關する編著も多く現はれたりしも、衰頽せしは惜むべきことなり。

三、近古

鎌倉幕府の世となりては、**明法家**の中原氏も**文章家**の大江氏も**算術家**の三好氏も、皆朝廷を去りて幕府の爪牙となれり。

醍醐天皇の朝、遣唐使の廢せられて後は、彼我の交通の途絶えたりしが、後鳥羽天皇の世、僧榮西の支那に赴きしより、彼我の禪僧相往來して、隨つて彼の文學を傳へたり。是に至りて文教の權僧侶の手に落ち、通常人は學問を以て僧徒のみの爲すべきこととして、之に委ねて顧みざりき。

後醍醐天皇の朝、僧玄慧を召して侍讀せしむ。是よりさき、經筵には主として漢唐の説を用ひしが、玄慧始めて程朱の説を傳へたり。是よりさき高倉天皇の世、清原頼業禮記中より中庸を表章して舊注をとらず、頼業は朱熹と同時にして、朱熹の**四書新注**未だ我邦に傳はらざりしに、其の所見の暗合また奇といふべし。

源親房も、亦玄慧に従ひて朱子學を修む。

南北朝合一の後、使聘の明及び朝鮮に往來せしに、其の使には、主として僧侶を用ひしより、僧侶には詩文を能くするもの多く、僧侶は漢文學の命脈を維持せり。應仁の亂後、帝室及び諸家等の藏書の兵燹に罹りたるもの、多かりしため、讀書の人も益、少くなりぬ。時に京都の五山にて刊書のことあり。又足利義政の支那より書籍を求めしが如きことあれども、教育の資にはあらずして、皆詩文の料とせるなり。五山の僧に、周興義堂、絶海良佐ありて、當時の四傑と稱せらる。五山文學は實に我邦漢文學中、一種特異の功績と色彩とを有するものなり。

後花園天皇心を漢文學に用ひられしが、當時清原業忠ありて近代の博學と稱せられ、大學中庸を講ずるには朱熹の章句を用ひ、論語孟子を講ずるには仍ほ古注を用ひたり。

四、近世

江戸幕府の世は、泰平うち續きて文化の進歩前古に比なし。ひとりこれに對比すべき平安朝の文化も、貴族が占むるのみにして庶民は與らざりしが、この時代はこれに異なり、學問藝術上下に涉りて、四民ともにその徳を享け、文學の趣味も弘く世に味はるゝに至れり。

文學復興の魁たりしは漢學なり。されど久しくうち續きし戰亂の後を受けては、いまだ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は、寧ろ儒教によりて社會の秩序を回復せんとしたり。かくて儒教の興隆に功ありしを、藤原惺窩、林羅山とす。家康の京都にあるや、しばしば惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず。門下の俊才羅山を薦む。羅山は家康の聘に應じて江戸に來り、律令制度の改定に參與して大功あり。これより子孫代々儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは朱子の學なり。朱學は既に前代より多少行はれたりしが、これより大いに世に行はるゝに至れるなり。

朱子學の外に陽明學も行はる。近江聖人中江藤樹その學説を奉じて實踐躬行を勵み、好んで孝經を講ず。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり。儒教かくの如く行はれてその社會に於ける感化も盛にして、山崎闇齋の如きは朱學の說によつて垂加神道を立て、世に用ひられたり。

將軍綱吉學を好み、屢儒者を集めて經義を對論せしめ、またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る盛に、學者一時に輩出す。林家には羅山の孫鳳岡、幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石、室鳩巢等、著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらずとし、別に古學を立て、その子東涯博覽にして、よく父の學を祖述す。荻生徂徠、江戸にあり、また朱子學を駁して、古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

筑前の士、貝原益軒も當時の碩學なり。性謙讓にして博識を銜はず。書を著すや、概ね平易懇切にして、實益あらんことを期す。江戸の新井白石は、將軍家

宣及び家繼に仕へて政務に參與す。學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして透徹せざるところなし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。

この時代において、和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。光圀は家康の孫なり。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしむ。その學の重んずるところ、大義名分を正すにありき。儒教においては、林家代々幕府に仕へて朱子學を立つ。この學に抗して、さきに古學、古文辭學は出でしが、その後また井上金峨の折衷學を唱ふるもあり、黨を分ちて相争ふ。松平定信、黨同伐異の俗の風教に害あらんことを患へ、林家の私學を幕府の有とし、林述齋をしてこれを統べしむ。また朱學を奉ぜざるものは官職に就くを得ざらしむ。これを異學の禁といふ。

異學の禁は自由研究を沮止したりと雖も、朱子學は盛にして儒者の輩出には甚だしき功ありて、時の學校昇平疊には、所謂寛政の三博士あり。稍、後れ

て佐藤一齋・安井息軒等あり。民間には龜田鵬齋・大窪詩佛・菊池五山等あり。京都には梁川星巖、其の門下大沼枕山・小野湖山・江馬天江等あり。頼春水、其の子山陽あり。山陽の山陽詩鈔・日本外史・日本政記等は當時甚だ著はれたるものなり。勤王攘夷・王政復古の氣運は、朝廷の式微を目撃したる是等京儒の鼓吹に依れるもの多し。

五、明治

(以下編者)

明治維新以來は洋學盛にして、漢學は地に落ちぬ。スマイルスの自助論の佩文韻府と交換せらるゝが如きすらありしといふ。以てその風尚を知るべし。後古典研究が堅實なる國民思想の醸成に必須なりとして、漢文學の講究も亦漸く擡頭し來り、中等程度以上の學校に於ては漢文科と稱するもの正科の一に數へられぬ。されど前代の如く、書生にして漢文を作り漢詩を詠ず

るが如きものは殆ど跡をたつに至れり。重野安繹・星野恒三・島中洲・土屋鳳洲等の碩學ありと雖も、その研鑽は前代に於て積める所なりき。明治二十三年教育勅語の煥發せらるゝや、その内容も儒教道德に關するもの多く、又その用語の支那の經典に據るもの多かりしは、漢文學儒教の進展に氣勢を添へたり。而して印刷術の進歩と共に古書の翻刻多く、漢文大系・漢籍國字解全書等の刊行あり。

六、現代

近年に至りて國語問題の論議せらるゝもの多く、就中漢字廢止論乃至漢字制限論より、延いて普通教育に於ける口語文の重視せらるゝに至りて、漢文の學習も輕視せらるゝことあるに至れるが、民間の金石文字に尙多くの漢文の使用せられ、日々刊行せらるゝ新聞雜誌に漢詩の載せられざるなく、漢文の價值未だ遽かに衰へざるが如し、特に歐洲戰亂以後思想界の動搖烈

しく、人心浮華輕佻に流るゝものあり。之が救濟の一助として、漢學の振興を痛論するものあるに至り、更に餘燼に光焰を揚ぐるの概あるを見る。

(四) 國學史概説

その一、平田篤胤まで

(平田篤胤の所説による)

まづ第一に申しておかねばならぬことは、此方の學を **古學** と云ひ、學ぶ道を **古道** と申す故は、いにしへ儒佛の道、いまだ御國へ渡り來らざる以前の純粹なる古の意と古の言とを以て、天地の初めよりの事實をすなほに説き考へ、其の事實の上に、眞の道そなはつてある事を明らむる學問である故でござる。

抑、此の學風の由つて來る其の始めは、東照大神君其の絲口を開かせられ、公子尾張の源敬公其の御遺意を紹がせられ、さて水戸中納言光圀卿大きに興起あらせられた事でござる。此の君の世にすぐれておはせることは、世の

人の能く存じ居ること、即ち世に水戸の黄門様と申すは、此の御方のこと
でござる。此の君が世の中に唯々唐の學問ばかり行はれて、御國の古き御代
の事などは心とする者のなきことをお歎きなされ、第一には禁裡を殊の外
御尊敬あらせられ、數多の學者を御抱へ遊ばし、先づ世に有りとある古書を
御集めなされ、又諸國の神社・佛閣及び在々に至るまで、あまなの人を分ち遣
はされて、いさゝか一枚二枚に足らぬものも、古き書物をば悉く御集めなさ
れ、それを明細に御吟味有つて、神武天皇の御代より後小松天皇の御代まで、
御代は百代、年數二千年あまりの間の事をつぶさに御撰びありて、**大日本史**
といふ歴史を御作りなされ、又古書はもとより堂上方の世々の御記録を始
め、數百部の書物の中より、朝廷の御禮儀に關する事どもを御類聚なされて、五
百卷餘の書となされたでござる。此の大業の御入用として、御高三十五萬石
の内十萬石を分けおかれまして、誠に數十年の御辛勞で、遂に御成就なされ、
扱て朝廷に奉られた處が、朝廷には御感斜ならず思召し、右五百卷の御書物

に、**禮儀類典**といふ題號を御つけ下されたでござる。又其の頃難波に契沖と
いふ人があつて、之は故有つて、眞言の僧とは成つたなれども、厚く御國の古
を信じ學んで、中頃より亂れ來りし假名遣を、古書の古言を證據として正し、
和字正濫抄といふ書を著はし、其の外いろく發明の書物を作つて、其の名
高く、光圀卿の御耳に入り、殊の外感じ思召し、度々御使者を遣はされたが、契
沖は固く御辭退申して罷り出でなだでござる。所が光圀卿には甚だ御慕
ひなされて、**安藤爲章**といふ御國學かこくにまなぶに志の厚い御家臣を契沖の門人に遣は
され、且つ萬葉集は殊の外古い歌集で、歌のみならず博く古を考へるの助と
なるべき結構なる書物なれども、其の頃まで世にある所の註解何れも宜し
くないに依つて、よく古に叶ふべき註を仕るべき由御頼みなされたでござ
る。契沖畏つて、是に於て**萬葉集の代匠記**といふを撰んで差上げました。萬葉
學は是より始まつた事でござる。光圀卿これを御覽なされた所が、今までの
あらゆる註釋とは事かはり、悉く古言古意を尋ねて之を記し、甚だすぐれた

る物ゆゑに、大きに御悦びなされて、白金千兩、絹三千匹を下されたでござる。契沖其の賜物を更に蓄へず、悉く貧窮の者に與へられたといふ事で、又右の代匠記を作るとて、夥しく古書を集め考へた時、其の餘力を以て古今集にも註を下して、之をば餘材抄と名を付けたでござる。此の註釋は其の時分まであつたのとは雲泥の違で、誠に結構なものでござる。扱て契沖は元祿十四年正月廿五日に、年は六十三歳で身まかられた。其の著はした書物すべて廿五部、卷數百廿卷餘もあるでござる。

此の契沖に追ひすがつて、荷田宿禰春滿翁、俗名を羽倉齋宮といふ人が出られて、大きに御國の學問を勵み弘められて四方に其の名高く、既に御國學の學校を京都に建てようとして公の御免を受けられ、其の地をば東山にしつらへようとせられたところが、其の事果さず、病によつて身まかられたでござる。此の翁著述の書すべて數十部、卷數百卷あまりありたるよしなれども、今纔かに遺りたるもの五六部、數卷ならでは無いが、我が古道學の道紀を立

てられたのは此の人でござる。此の次が賀茂の縣主眞淵の翁、通名を岡部衛士といふ人が出られて、家の號を縣居とつけられたに依つて、縣居の大人また縣居の翁など、も申すでござる。扱て此の翁荷田の大人の門人となり、其の本志をついで、勤學いたされたでござる。

扱て此の眞淵の翁は、其師春滿翁の上を今一段上つて、なほ深く考へ、始めて古の道を明らかに得んとするには、漢意佛意を清く捨てはてねば眞の處は得がたく、歌を詠むも、古の言を解くも、みな神代の道を知るべき便なる由、懇にとき誨され、扱て遂に田安の殿に召出され、御國學の御師範を申し上げられたでござる。其の門人にも勝れた人が多く、藤原宇萬伎、楯取魚彦、また近頃までも在世した加藤千蔭、村田春海なども、皆此の翁の弟子でござる。扱て此の翁は明和六年十月晦日に、行年七十三にて身まかられたでござる。其の著はされた書物が四十九部、卷數が百卷ぢかく有るでござる。

此の次は即ち拙者どもが師と仰ぐ本居先生平阿曾美宣長の翁で、初めは

醫を業とせられたに依つて、本居舜庵といはれましたが、後に紀伊國中納言殿に召出されました、中衛と改められたでござる。其の先祖は桓武天皇の御裔、池大納言頼盛卿六代の後胤、本居縣判官平の建郷たけさとと申した人の末にて、伊勢の國松阪の人で、家の號を鈴の屋とつけられたに依つて、世に鈴の屋の大人も、鈴の屋の翁とも申すでござる。扱て此の翁の學問のいみじきことは世に類なく、それは其の著はされた書どもを讀み明らかれば能く知れることとで、申すまでは無けれども、其の初めは翁の學問を深く學ばれて、それより御國の學まなびに移り、縣居の大人に従つて其の大志を受繼ついでがれ、學問の道に於ては、古より類なき大功を立てられたでござる。其の御心緒こころづかひの事をかい摘んで申さば、先づ其の著はされたうひ山蹈といふ書に言はれた趣は、人として、人の眞の道はどうしたものぞといふことを知らずに居るべきことではない。學問の志なき者はそりやどうも爲方は無けれども、かりそめにも其の志があるならば、同じくは眞の道の爲に力を用ふべきことぢや。然るに道の事を

ばなほざりにさしおいて、唯末の事にばかりか、づらつて居るといふのは、それは學問する者の本意ではない。と言はれ、又「學問は初めより其の志を高く大きに立て、其の奥の所まで極め盡さずば止むまいと堅く思ひこむがよい。此の志が弱くては、おのづから倦怠することが出るものぢや」とも言はれましたでござる。此の通り人にも教へられる程のこと故に、自分は實に此のとほりいたされたでござる。是も亦其の著はされた書ども讀めば能く分りますでござる。

其の門人帳を見まするに、弟子のない國は六十六箇國の内に、唯二箇國ならではない程のことと、殊に享和元年の春上京致されて、四條に舍つて居られたみぎりなどは、公家の御歴々がた、學問を公に心がけらるゝ御方は、翁の宿へ御尋ねありて御入門なされ、世にも人の知つて居る中山大納言殿を始め、參らせ富の小路新三位殿、芝山中納言殿など、其の外夥しくありましたでござる。既に其の頃御歌の宗匠とあらせらるゝ、日野一位資枝卿ですら、御感

心の餘りに、其の御孫日野中宮權大進殿と申すを遣はされ、翁を師と御頼みなされて、其の始めて入らせられた時の御歌が、和歌の浦に行方を辿る海士小船、今より君を梶とたのまん」と仰せられたでござる。此の外にも御尋ねなされる御方々が、各此の心ばへの御歌を御詠みなされ、何れも翁をさして本居先生、鈴の家の翁、又は鈴の屋の大人と御尊み遊ばし御頼みなされて、翁の講釋を御聴きなされ、閑院の宮様、妙法院の宮様までも翁を召されて御慕ひ遊ばし、實に千古の昔より、かやうの事はありは致さんでござる。さて翁の著はされた書物が五十五部、卷數百八十餘卷あつて、何れもく、學問する者は、常に傍を放されぬ物で、一部一冊として、是はと人の手を拍たぬものは無いでござる。扱て此の先生は享和元年九月廿九日に、御年七十二にて身まかられたでござる。猶是等のことは、別に委しく記した物があります。今は彼の驅けて通ると申す程のこと故に、大略の中の又大略を申すのでござる。―古道大意―

その二、篤胤以後

(芳賀矢一氏の所説による)

本居宣長没後の門人が二人ある。その一人は伴信友、他の一人は平田篤胤であります。篤胤は信友よりも二つ若い。それで仲好くして、信友の方を篤胤は伴大兄といひ、一方は雅弟と云つて、兄弟のやうに手紙をやりとりして居りました。が、元來學風なり性質なりが合はぬ人である。信友は温厚な人であつたが、篤胤は又極めて覇氣のあつた人である。この二人は、一方は考證の大家、一方は神道を樹立した人であります。ともに精力絶倫な人であるといふことは、よく似て居るのであります。

篤胤は大いに神道を唱へ、宣長の古事記を主張したのに、一步を進めて「古史傳」といふものを作つた。どういふ譯かといふと、宣長は古事記だけを非常に貴重なものにして居るけれども、古事記以外には出ない。併し日本には古典が澤山ある。風土記もあり、古語拾遺もある。又事實の上からも見なければ

ならぬ。日本紀の事實をも見なければならぬ。古事記だけでは日本の古道は分らない。他の書物も考證してやらなければならぬといふので、書いたものが、**古史成文**・**古史徴**であります。其の註釋を書いたのが**古史傳**であります。即ち宣長よりも更に一步を進めて居つたのであります。

篤胤は覇氣の盛な人でありますから、非常に熱心に研究した人でありま
す。その儒教や佛教を攻撃し罵倒するや、随分過激な言論を用ひてしたので
あります。その過激なことは過激であります。單に罵倒して破壊するだけ
ではない。破壊の後に建設するといふことを忘れないのであります。精力絶
倫で儒者の書物も読み、佛教の書物も読みました。國學者であれほど佛教の
書物を讀んだ人はない。澤山に讀んで、其の中から向ふを攻撃する材料を見
付けて來る。さうして駁撃する。此方はあらゆる學問をして居つて、向ふの急
所を突くのでありますから、逆も之に對して太刀打は出來ないといふやう
な強い勢力であつたのであります。さうして此の時分には、既に和蘭學も盛

になつて來ましたから和蘭の説なども入れ、西洋の學說なども入れて居る。
篤胤の歌に、月花をあはれと我も見てはあれど、あはれと歌ふひまなかり
けり。といふのがありまして、さういふ風流韻事に掛つて居る暇はないとい
ふのであります。眞淵翁は文才があつて、歌を詠み文章をかいた。これが初期
には大成功の基でした。宣長は諄々と書いたけれども、歌や文章の方には力
を注がなかつた。さうして大いに道を説きました。所が篤胤は初めから歌文
は眼中に置いてない。道を立てることが主眼であつたのであります。そこで
一方に於ては非常に凝固まりの門人が篤胤には出來ました。

篤胤の子鐵胤は、明治の初めには大學中博士として居つた。平田の門人は
非常に多い。一方にはヒドク悪口をいはれた人でありませんが、門人の數は一
千四百と云ふのでありますから非常なものである。一方には破壊的論法を
用ひ、一方には建設的に神道を立てようと云ふやうな考は、幕末の勤王論に
は非常に効力があつたのであります。

維新の時に岩倉公の事業を助けた玉松操と云ふ人の如きは、大國隆正の門人である。此の大國隆正は、平田の學風を其の儘承けた人である。其の門人から玉松操や福羽美靜などが出て居る。

幕府の末になつてからは、到る處の藩の學校で、國學を其の教科目の中に加へたのであります。初めは漢學ばかりであつたが、段々に國學を加へる様になつた。各藩共に相當の國學者が相當の道を説いて居つたといふことが、日本の國の爲にどんな結果を起しましたか。さて學問の力の偉大なものであることを認めなければならぬのであります。

(五) 國語沿革概説

(佐々政一氏の所説による)

一、總説

凡そ一國の國語は、その國民の有する他の文化と共に變遷す。而して其の變遷の状態は、左の四様の因による。

- (一) 新語の發生
- (二) 古語の消滅及び語意の變化
- (三) 外來語の添加
- (四) 音韻の變化

これなり。

二、上古

我が國の言語は、世界に於ける言語の系統上果して如何なる語系に屬するか、又如何なる語系の言語の影響を受けたるか明瞭ならずして、學者の間に於ける説も必ずしも一ならず。且つその上古に行はれたりと認めらるゝ言語といふも、古事記、日本書紀、風土記等の中に於て僅かに見らるゝのみ。而かも之を記したる文字は、吾等日本民族が固有の文字にあらざれば、果して全く正當にあらはし得たるか否かも疑はしきものなり。

しかはあれど、今最も普通なる説に従へば、上古のわが日本語の特色は、左の如くなりしが如し。

(一) ア行、ヤ行、ワ行、ハ行について

イエウは今日と同様に發音したるが如きも、キエヲをイエオと發音し、ハヒフヘホをワイウエオと發音するが如きことはなかりしが如し。

(二) 濁音を以て始まる語なし。

(三) 良行音を以て始まる語なし。

(四) ンといふ鼻音なし。

(五) 拗音なし。

(六) 促音なし。

(七) 半濁音なし。

現今諸社の祭祀に用ひらるゝ祝詞は、上古の遺風を繼承したるものなるが、今日作製するものゝ上にも、上にあげたる條項により、之を捧讀するにも亦これに従へるが如し。

三韓との交通は神代よりありて、崇神天皇の朝には、天日槍の來りて歸化するあり、神功皇后は魏に使を遣し、又三韓の征服あり。かくて直接間接に支那朝鮮の文字も入りつらんが、應神天皇の朝に漢學の傳來あり。後欽明天皇の朝に佛教の渡來ありて、**漢語・佛語**の入來あり。而して當初の漢文は主と

して **吳音** を後、隋唐の交通は **漢音** を將來せり。古事記には吳音多く、萬葉集には漢音多し。かくの如くして我が國語中に、

- (一) 拗音 無量壽 舍利
 - (二) 鼻音 山海 沙門 三寶 天皇
 - (三) 行音を以て始まる音 盧舍那佛 力田
 - (四) 濁音を以て始まる音 餓鬼 藐姑射山 比丘
- を生じたり。

當時の國語記述法には三種あり。

- (一) 漢文形に書き國語讀にするもの。
- (二) 漢字の音訓を用ひて國語を記すもの。
- (三) 兩者の混用。

三、中古

この時代に於ける國語上の著るしき變化は、

- (一) 外來語の増加
- (二) 外來語の日本化
- (三) 固有語の音韻轉化

これなり。なほ、

- (一) 語意の轉化
- (二) 語法の變化
- (三) 單語の消滅

等の事實もありたり。

消滅したる語には、

わご大君 かれ(故二) もとな はしきやし うれむぞ(如)

何ゾ

等あり。語法の變化せるものには、

名告らさね名のらせ給へトナル

見ればあかずけり——あかざりけりトナル

消なば惜しけむ(惜しからんトナル)

假庵もまだこぼたねば(こぼたぬにトナル)

人とあらずば(人ならんよりはトナル)

の如きあり。語意の變化には、

かなし 深く感ずガ 悲し トナル

うるはし 愛すべしガ 美し トナル

なげく 長息すガ 嘆く トナル

の如きあり。尙我が國に同化したるものには、

對 氣色 格子 不死 猛

五穀 瑠璃 長者 金青 請じ入る

切に 優に 本意 前裁 大納言

羅蓋 具す(伊勢竹取)

御覽じ 後涼殿 更衣 曹司 觀音

僧正 伴僧 御加持(源氏)

驗者 物の怪調ず、獨鈷 珠數 護法

念ず 講ず(枕草紙)

當時外來語の日本化したる方法の主要なるものを舉ぐれば、

(一)拗音が直音に變じたる

從者 下衆 受領

(二)上なる音が鼻音を以て終るときは、下の音の始めにも鼻音を反覆する

こと、即ち連聲、

三位 觀音 閑院

(三) 接尾語・助詞・動詞を連ねたる、

藹たし 氣色ばむ 艶だつ 調ず
 講ず 假裝す
 艶に 優に 掲焉に 切に

といふが如きものあり。

又 音便 といふものを生じたり。その他、

通音 たかけむら たてまくら

とぼもしび かなしぶむ

約音 あそみ(朝臣) か(り)有(斯)

略音 かへ(ル)さ あ(ル)めり お(口)がむ

の如きものを用ひらるゝに至れり。

この頃までは假名遣の誤謬は絶えてあらざりしが、發音を滑かにする音韻の轉化日を追うて漸く繁くなりしかば、所謂假名遣も字音といはず國語

といはず漸く亂るゝに至りて、所謂定家假名遣といふが如きもの生れ出づるに至れり。

四 近 古

この時代は政治上の大混亂期なると共に、又國語の大混亂期なりき。而して當時の國語の中心は尙京都にして、これに各種の方言を交へたり。當時の變遷の主要なるものは、

- (一) 口語と文語と漸く分離するに至りしこと
- (二) 文語の種類甚だ雑多なること
- (三) 漢語佛語及び武家語より來りし新熟語多く生じたること
- (四) 鼻音促音、パ音等多く生じ
- (五) 中古の假名遣混亂したること
- (六) 語法の變化起り始めしこと

等なり。

當時の文には、左の五種のもの出づるに至れり。

- (一) 中古文に似たるもの
- (二) 漢語・佛語を更に多く混じたるもの
- (三) 漢文に似たるもの

この種の文には、當時の新熟語最も多し。

(四) 口語に近きもの

(五) 口語の部分と文語の部分とを混じたるもの

以上の語彙語法の變化は、當時の所謂軍記文を閲するとき、その實例を容易に求め得べし。

五、近世

この期に於ては、文語に於ては前代の變化漸く圓熟し來りて、その使用の

範圍も自然に定まれり。即ち口語文交りの **俗文** は下流に、**和漢混和文** は上流に、**擬古文** は國學者間に、而して **書牘文**・**公用文** は一般に之を用ひられたり。

語法の變化は甚だしく、口語文法・口語法など、稱すべきもの、出現するに至れり。その一二項をいへば、

- (一) 上二段・下二段の動詞が、上一段・下一段に轉じたること
- (二) ラ行變格は滅びたること
- (三) 時の助動詞の中、完了を表すものは **たりのみ** となり、又それが **たのみ** となりたり。

世の降るに従ひて、音韻上の變遷極めて廣くして、略音・通音・約音等は前代につぎて盛にして、音便の如きも、イ音便・ウ音便・促音便・撥音便等の如き音便は、最も完全に形成せられたり。而して今日の口語は、殆どすべてこの時代に起り、或は成りたり。

六、明治

(此の項以下編者)

漢文の興隆と西洋文の翻譯とは、いたくわが國語の語法を紊すに至りたり。此の故に學校教育に於ても、之を純一ならしめんが爲に、中古文典をもととせる文典、中古の假名遣を基とせる假名遣を採用するに至れり。

江戸が東京となりしより、江戸語の中の高尚なる言語は、漸く全國の標準語とならむとする傾向あるに乗じて、主として其の口語より成る文章、即ち所謂言文一致體を主張するもの起り、小説などを始めとして、小學校の教科書等にも之を採用するに至れり。口語文といふもの、亦一種の文體となれり。而して普通文體と稱するものは、却つて普通ならざらんとす。これ實に明治の狀態なり。

語彙の方面より之を観るに、西洋の文化の漸入と共に、これに關聯する新語入り來りて、所謂新しき言葉は非常に數多くなれり。その新語は、或は原語の儘用ひらるゝもあり、翻譯して用ひらるゝもありて、種別一ならずと雖も、兎にも角にも、その數に於て増加せしこと日一日より盛なり。

世態も複雑となり、世事も多端となり、外國との交通、文化の吸收、かくて國語も漸く複雑となり、混亂を來さんとするに至りて、明治三十五年三月勅令を以て文部省に國語調査會を設けられ、國家が國語の整理改善に着手するに至れり。

七、現代

大正に入りては、明治の餘勢は更に猛烈となり、歐洲の戰亂の如きも、亦直接間接に國語に影響し、國語問題に關聯する事相を生じたり。

まづさきに設置せられたる國語調査會も、大正二年の行政整理に廢止の運に至りしが、大正十年更に勅令を以て、文部大臣監督の下に臨時國語調査

會の設けらるゝに至れり。その委員に列せられたる人々は、學者・教育家・文藝家・印刷業者及び新聞雜誌記者などの諸氏なりき。同會に於ては、先づ第一に常用漢字の調査整理、第二假名遣の調査整理、第三文體の調査整理を行ふ方針決定せられて、着々其の歩を進めつゝあり。

而して口語文は益、其の使用範圍擴大せられ、新聞雜誌・著書等、その口語文によるもの甚だ多くなり、從來謹嚴にして尙古的氣分の濃厚なりし公用文にも、口語文を用ふるものあるに至り、式辭文にも漸次これを見るに至れり。今やわが國語、わが國文は甚だ複雑混亂の狀ありと雖も、亦これが整理も漸く緒につかんとせり。そが理想的に整理せらるゝは、果して何時ならんか。

(六)日本書道概説

(中村秋香氏の所説による)

一、上古

書は文字渡來の時に起れるは勿論なれど、今世に残存せるもの、推古天皇の頃のものより古きはなし。さるからに、應神天皇の頃より以降三百年間の書は、果して如何なるものなりけん。其の筆蹟を知るによしなし。持統天皇の時、百濟の吉士善信書博士となりしが、當時の書には銅に彫りしもの、石に刻みしもの、繡にせしものなど残りて、今なほともに存せり。

奈良の朝に至りては、寫經の事廣く行はれて、皆巧妙緻密の域に達せり。其の書法に至りては、大概王羲之に出でたり。此の際、吉備眞備唐にありて書法を張旭に受け、歸朝後菅原古人に授けて、それより菅氏世々此の法を嗣ぎ、遂

かしこき御身にましまして、最も此の道にたけたまへり。また僧空海、橘逸勢

暮春の日の光を
花の影を
影の首
藤原佐理

藤原佐理

藤原佐理

花骨不語偷思得流

水紅櫻名暗視有春

芳難治浪と流鶯

畫日報毀也

藤原佐理筆蹟

の如きも共に入唐して學びしものなれば、其の書風純然唐人の風あり。これを本朝の **三筆** とす。尋いで小野道風筆蹟殊に絶好なりしかば、藤原佐理行成と、もに **三蹟** と稱せらる。嗟哉天皇は常に空海と御手蹟を磨き給ひしが、一日御手本あまた取り出でられける中に、殊勝の一卷ありけるを、天皇是は唐人の手蹟なり、その名を知らず、さ

ふやうもはうけの
ふやうもはうけの
ふやうもはうけの
ふやうもはうけの

紀れど重寶なり。とて空海に示されたる蹟に、そは空海の筆な

りき。

延保二年三月三日有曲水宴所設訖立所

侍子東又庇之給公卿座如臨時余假設文

人座於所海邊 取上人在溝 武部大補直幹

及殿上文人藏人所又京生所書所學生之と

入自仙美門着座探韻畢賜酒肴公卿以下

見流至海水と文人亦飲晚頭石案所令奏

弦哥誦詩了又奏管弦長給公卿祿左少將

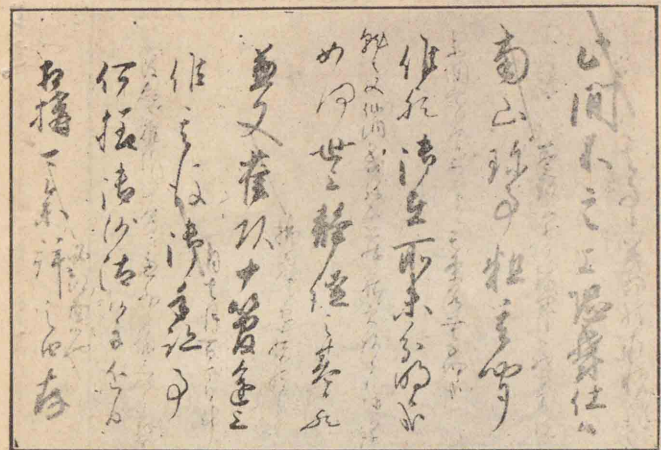
洛時唱見恭後日給侍臣及文人樂所人祿

藤原公任筆蹟

假名文字の世に行はるゝに至りては、**紀貫之**、藤原公任最も名あり。後世これを稱して **上代流** といふ。三筆三蹟とともに書を學ぶもの、模範に取る所とす。ことに貫之は、その文字の正しきを以て推さる。

三、近古

行成の子孫累世書をよくし、これを世尊寺と稱したりしが、後此の法を



持明院家に傳ふ鎌倉の末、伏見帝の皇子に尊圓親王といふがおはせしが、才藝人にすぐれて書を妙にし給へり。こゝに於て、朝野の書風靡然一變し、後世これを青蓮院流または御家流と稱して翫べり。後此の流數派にわかれ、廣く傳播したりしが、ひとり假名文字に至りては、尊圓親王なほ伏見天皇に及ばざるより伏見院流として學ぶに至れり。かくの如く本邦に能書多かりしかば、支那風の書法はいつとなく變換して、全く本邦一種の筆法を構成せり。然れども、歸化の僧寧一山等支那風を捨て

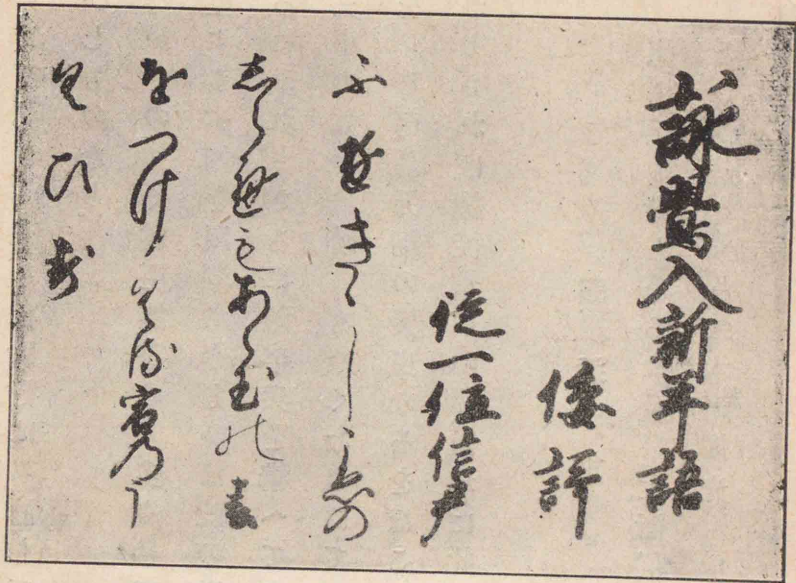
ず、かの國の書法もなほ行はる。而して當時僧家の如きは、おもに其の風を學びしものなり。

かくの如く君臣能書の人多く、昇平の世運筆蹟の巧拙を以て、其の人を輕重するが如き風潮ありしかば、此の道に堪能なる人は大いに其の志を達するに至れり。さるに源平兵を構へてより以後、世は全く戰鬪修羅の巷となり、文事の如きは跡方もなくなり、社會の氣風はひたすら攻城野戰の功を談じ、弓馬刀劍の優良なるをほこりて、かへりて文筆あるものを笑ふに至れり。されば緇徒長袖の間、僅かに此の道を傳へて之を維持せり。

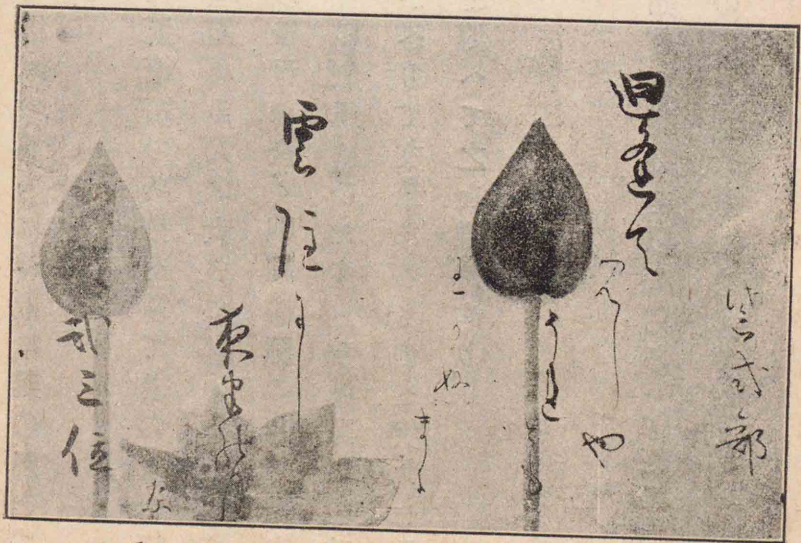
四、近世

徳川氏の世となるに及び、近衛信尹の如きは能書を以て名あり。世に三藐院といふ是なり。また本阿彌光悅、僧照乘の如き、共に逸名あり。世呼んで寛永

の三筆といふ

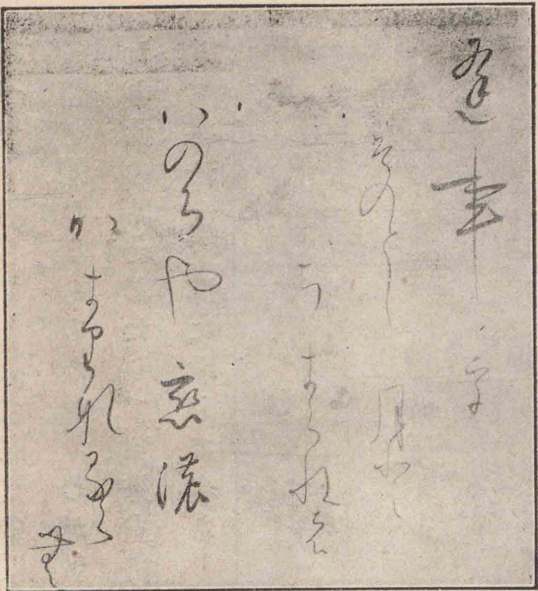


近 衛 信 尹 筆 蹟

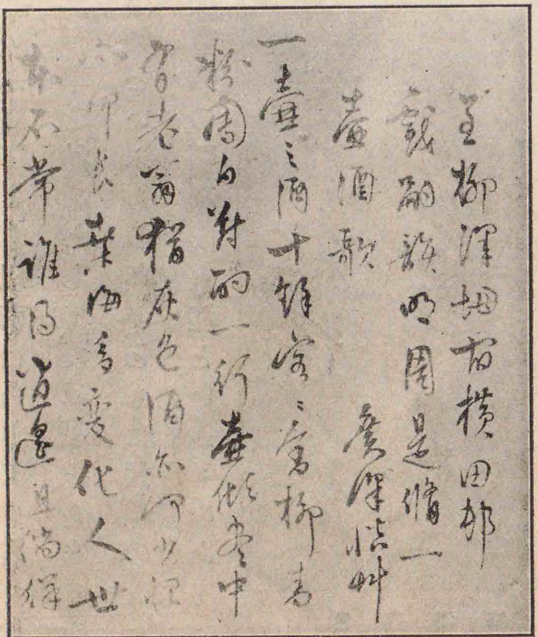


本 阿 彌 光 悦 筆 蹟

照乗は松華堂と號す。門弟に大橋長左衛門といふ人あり。大橋流の祖なり。幕府おほくは此の流を用ひて、法令法度を書せり。元祿の頃細井廣澤といふものあり。世に唐様と稱するものを始めて、盛に行はれたり。廣澤始め北島雪山に學ぶ。雪山もと支那人俞立德に學び、書法を歸化の僧即非に問ふ。立德

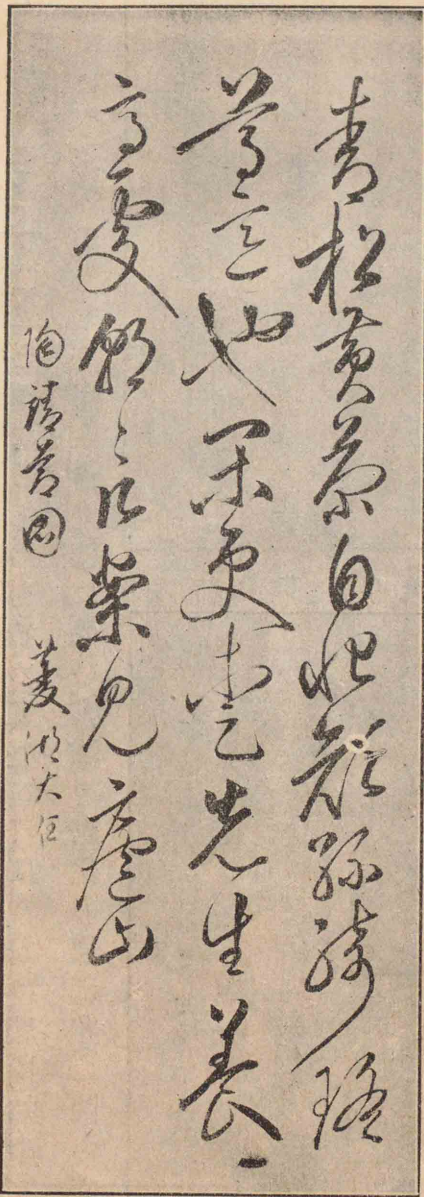


松 花 堂 昭 乗 筆 歌 卷



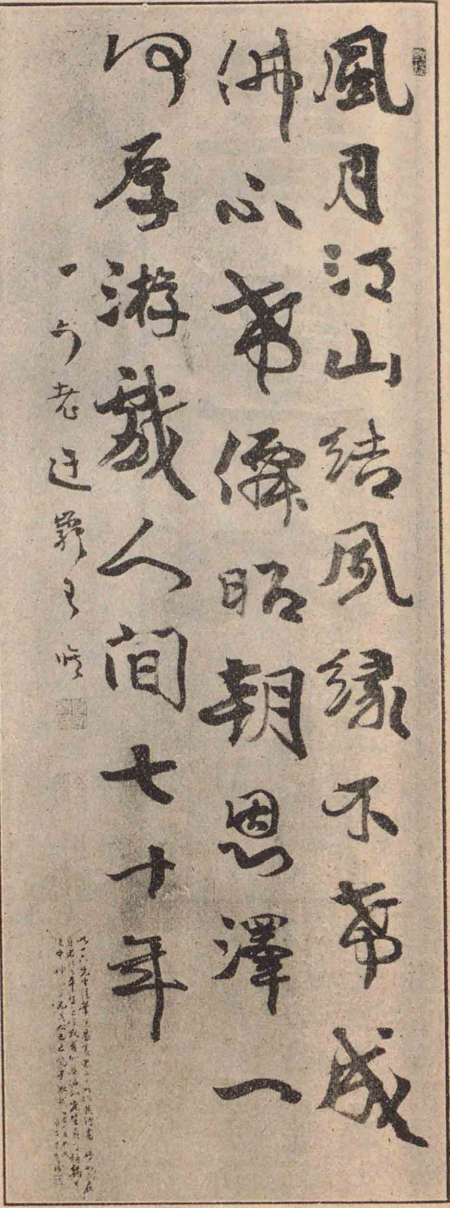
細 川 廣 澤 筆 蹟

みづから稱して文徵明四傳の門人といふ。廣澤より以前にありては各種の書體を兼ねるものなかりしが、廣澤眞行草を始めとして、なほ篆隸をよくしたり。此の時にあたりて、深見玄岱、林道榮といふものあり。ともに長崎の人に於て、書法を支那に取りて名あり。天明寛政の頃、澤田東江といふものあり。文

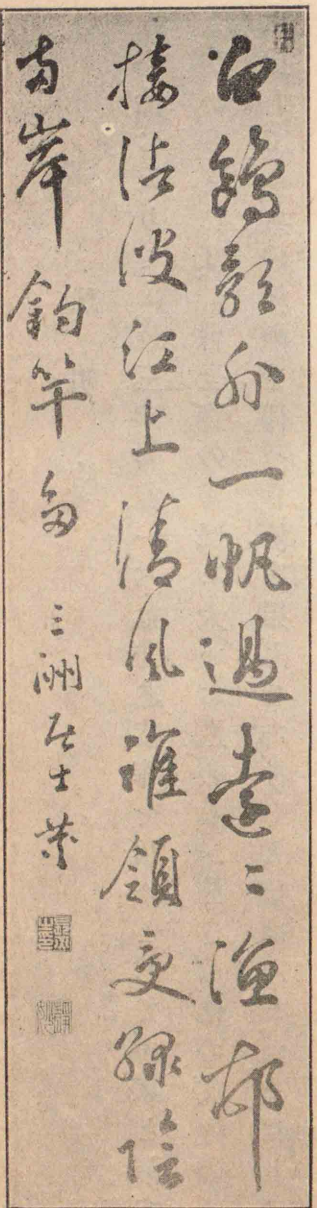


廣澤眞行 卷

政・天保の頃、市河米菴、卷菱湖といふものあり。皆能書を以て名あり。或は趙子昂により、或は米元章により、以て諸體を兼ねたり。



市河米菴 卷



長洲三洲 卷

五、明治

明治に入りては、長三洲・巖谷一六・金井之恭等を始めとして、書家と稱する人少からざれば、社會全體の書風も大いに進めるが如きも、他の文運の開進に比しては、其の權衡を得べき能書果してありしといはんか、いまだ其の詳なるを知らず。

六、現代

書畫大觀

大正に入りては、日鳴鶴下部鳴鶴・小野鷺堂老等の書家、晚節の勇人器を斯界に致して提撕する所少からざ

れども、諸種の學術技藝の進歩に伴ふ能はず、日常の記録にも洋筆の盛に用ひらるゝに至り、所謂書道は昔日の觀を呈せざらんとす。

よし書筆の法盛ならずと雖も、古法なほ存する限りは、就きて學ぶべきなり。書は其の人の性をあらはすとさへいへば、深く心を用ふべきことなり。さるはうるはしき手蹟を見たらん折は、何となく筆者の奥ゆかしくて、其の人の慕はしく、あひ見まほしとおもふは誰も同じからんを。げに手蹟は其の人の人ざま、心がら、おのづから見えすくものなり。

(七) 國字概説

わが國の上古に於ては、今日より見るも尙世界に傑出したる文學は有したりしかど、文字は有せざりき、**日文・秀眞**など稱するものありたるが如く傳ふれども、後世の假作に過ぎず。文字の存在は、實に支那との交通による漢字の輸入に始まる。後漢の光武帝が、筑前の國伊覩の縣主に與へたりと稱せらるゝ、蛇紐の黄金印に、漢委奴國王の文字ありといふ。支那文字が支那より直ちに我が國に入りしは、これがはじめなるべし。崇神・垂仁の際には三韓との交渉ありしが、その頃三韓には既に漢字を用ひたることなれば漢字も必ずや我が國に傳はりしなるべし。されど確證の徵すべきなし。應神天皇の朝、百濟王阿直岐をして來貢せしむ。皇子稚郎子就いて學び給ふ。而して更に博士王仁論語及び千字文を將來せり。これ實に支那の學問文字の朝廷に入りし初めなり。

王仁漢籍を獻じてより百三十年、履仲天皇の四年記録の官を諸國におかれたり。我が國に於て明らかに文字を使用したるは、これを初めとす。漢字漢書の輸入ありしと雖も、その普及せざりしことは、維新以前の蘭學よりも甚だしかりき。爾來年を経るに隨ひて、記録・法令等漢文に倣ひて之を記し、或は漢詩・漢文も之を試むる人あるに至れり。然れども、漢字によりて國語を記すことは未だ講究せられず。奈良朝の初めに至りて漢字を利用しつゝ、表面こそ漢文仕立なれども、國語もて事實を寫すを主とせし一體の書法あらはる。古事記も風土記も、此の法によりて記したるなり。

爾大伴連等之祖。道臣命。久米直等之祖。大久米命二人。召兄宇迦斯。罵詈云。伊賀所作仕奉於大殿内者。意禮先入。明白其將爲仕奉之狀。而卽握横力之手上。矛盾氣矢刺而追入之時。乃己所作押見打而死。卽控出斬散。故其地謂宇陀之血原也。

中には漢文の體にして國語讀みにせるもあり、又文字を借りて國語を寫

せるもあり。今假りに **古事記體** といふ。

この文字を借りて國語をそのままに寫せるものは、之を漢文に比ぶれば、わが國文を記すの機關として便益多けれども、なほいはゞ、何れが音字にして何れが訓字なるか、一目瞭然たらず。此に於てか、更に一步を進めたる **宣命書** なるもの出づ。

御年皇神等 能 前 爾 白久。皇神等 能 依 左志 奉 半 奥津御年 乎。手肱 爾 水沫

畫垂。向股爾泥畫寄 氏。取作 半 奥津御年 乎 八束穗 能 伊加志穗 爾 皇神等 能

依 左志 奉者初穗 乎波 千穎八百穎 爾 奉置 爾。隠閉高知隠腹滿雙而汁 爾毛

穎 爾母 稱辭竟奉 半

これなり。

さて萬葉集に至りては、國語を寫す漢字の用法非常に巧みとなりて、大略左の用法あり。

(一)眞字假字 心を許己呂 郭公を保登等藝須

(二)通正字 春霞 秋風

(三)假意字 鶴鳴 垣津旗

(四)義訓字 春鳥 金風

(五)戲訓字 十六 山上復有山

の如し。この第一の法にて使用の文字、同一音には大概同一字を用ひしなるべく、これやがて今日の假名の起源となれるものにて、この書法を **萬葉書** といひ、この假名を **萬葉假名** といふ。

この種の用法一時行はれたりしも、漢字の筆畫の繁雜なるが爲に草體漸く行はるゝに至り、或は楷體の一部分のみを標記するに至れり。而して草體の更に省略せられて、又楷體の一部分の公認せらるゝもの、やがて決定するに至れり。前者は **平假名** となり、後者は **片假名** となれるなり。

平假名は、いろは又はいろは文字といふ、俗に弘法大師の作といへり。いろは歌は、或は弘法大師の作ならんも、その文字は世間通用のもの、最も用ひ

らるゝ範圍廣く、筆畫の利便なるものを整理したるなるべし。發達上の如くなれば、**變體の平假名** 尠からず、それ等の變體のものには、字源を異にするもの多し。

片假名にも亦各種の變體ありて、其の不便なるものが、文字の生存競争の結果滅亡して、今日の所謂片假名字體に一定せしなるべし。古來片假名字の發明者を吉備眞備とすれども、その憶説なるは論なし。然れども、其の所謂**五十音圖**なるものは、その音韻組織によりて考案せる所のものなるを見れば、相應に當時に優れたる**悉曇** 學者なりしが如し。

(八) 現代の國語問題

(日下部重太郎氏の所説による)

明治以後外國との交通盛となりしことは、國語・國文の上にも影響する所甚だ多く、外國語の國文中に入れ用ひらるゝあり。文も亦歐文直譯體の行はるゝありしが、やがて日本化して普通文となりぬ。此の間所謂言文一致説唱へられて、小説・雜記を始めとして漸く行はるゝに至り、近時は新聞・雜誌の如きは勿論、論文に著述に殆ど用ひられざるなきに至りぬ。されど大體よりいへば、所謂普通文又は所謂書簡文のなりけりたりを、たゞであるに、又候御座候を、ます御座いますに變じたるだけにて、大體に於てはさまでの差別もなし。よしや今の普通文が口語文となりたらんも、其の素質に於ては容易に變化するものにはあらざらん。

普通文を口語化することに關しても、明治以來の國語問題として論議せ

られたるものにして、今尙其の運動衰へずと雖も、その國語問題の主なるものは、國字問題なり。明治の初年に於ては歐化主義に耽溺して、或はわが國語として英語を採用すべしなど、の僻論をなしたるものありしも、偶以て外人の侮蔑を買はんとしたるのみにして已みぬ。今日に於ては整理すべしとの説は尙之をなすものありて、又首肯せらるれども、外語轉用の如きは全く其の影を認めず。一にわが本來の國語を能ふべくんば改善進展せしめんが爲に整理せんといふにあり。然るに國字問題に至りては、多少其の趣を異にするものあり。

國字問題は、現時尙歸着する所を知らずして、種々なる立脚地より種々に議論せられつゝあり。今國字論者のいふ所を概観するに、大體改良論と非改良論とに別つを得べし。而してその改良論は、目的論と方法論とに分つを可とす。その目的論とは、論者の目的とする將來の國字はかくあるべしといふにて、その方法論とは、論者の目的とする將來の國字に到着する方法はかく

あるべしといふなり。或は目的論としては假名をとり、方法論としては漢字節減の手段をとらんとするものあり。或は目的論としてはローマ字をとり、方法論としては漢字を節減し、假名も用ひんとするものあり。或は目的論としてはローマ字をとり、たゞ方法論として漢字節減をとるものあり。

さて國字改良の目的論を、漢字節用説と漢字不用説とに分つべし。漢字節用説は所謂漢字節減説などなるが、方法論の漢字節減など、の混同を避くる爲に、特に漢字節用と呼ぶ。漢字不用説は漢字廢止説など、も呼ばるれども、漢字にて書きしものを全く廢止するかの如き誤解を避くるが爲に、國字としては漢字を用ひずといふ意味にて漢字不用説と呼ぶ。漢字節用説は漢字を節用して消極的の國字改良を行はんとするなり。また漢字不用説は積極的の國字改良を行はんとせるものにて、國字としては漢字を用ひずといふことには一致すれども、改良の目的とする文字には假名説あり、ローマ字説あり、また新字説もあり。

つぎに國字改良論に對する非改良論を、現狀維持説と自然淘汰説とに分つ。現狀維持説は現在の如く漢字と假名とを併用せば可なりといふなり。自然淘汰説は現在の國字に満足するものにはあらざれども、故らに國字改良を行はずとも、たゞ之を放任すれば自然淘汰の爲に國民に便利なる國字の定まるに至らんと説くものなり。

顧みるに、最近の國字問題は慶應二年十二月、前島密の將軍慶喜に上れる「漢字御廢止の議」に火蓋を切りてより、以上分類を試みたる諸説行はれて、南部義籌氏は明治五年四月、文字を改換する議を文部省に提出してローマ字論を唱へ、同年文部省は新撰字書を編纂して漢字節用を試み、爾來六十年、或は個人之力説するあり、或は結社協會にて運動するあり、或は官令にて規定せんとするあり、而してまだ歸趨する所を知らず。思ふにこの解決には尙十數年を要すべし。吾人は慎重に計較して、妄りに新奇に趨りて悔を千載に貽すなからんことを要す。

外 篇

(一)上古文例

一、大祓詞の一節

(祝 詞)

かく宣らば天つ神は天の磐門をおし披きて、天の八重雲をいつの千別に千別きて、さこしめさむ。國つ神は高山の末、短山の末に上りまして、高山の伊穗理、短山の伊穗理をかき別きて、さこしめさむ。かくさこしめして、皇御孫の命の朝廷を始めて、天の下、四方の國には、罪といふ罪はあらじと、科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く、朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く、大津邊に居る大船を、舳解き放ち、艦解き放ちて、大海の原に押し放つ事の如く、彼方の繁木が本を、燒鎌の敏鎌もちて、打ち掃ふ事の如く、遣る罪はあらじと、祓ひたまひ、清めたまふ事を、高山の末、短山の末より、さくなだりに落ちたぎつ、速川の瀬にます瀬織津姫といふ神、大海の原に持ち出でなむ。かく持ち出で往きなば、荒潮の潮の八百道の、八潮道の潮の八百會にます、速開津姫といふ神、持ちかゝ吞みてむ。かくかゝ吞みてば、氣吹戸にます氣吹戸主といふ神、根の國、底の國に氣吹き放ち

皇が大命を諸聞こしめさへと宣る。是を以て、百官人等、四方の食國を治めまつれと任せ給へる國々のみこともちどもに至るまでに、天皇が朝廷の布き給ひ行ひ給へる國の法を、過ち犯す事なく、明き淨き直き誠の心をもちて、いやすゝみくゝて、たゆみ怠ることなく、勤めしきりて、事へまつれと詔り給ふ大命を、諸聞こしめさへと宣る。故れかくのさまを聞こしめしさととりて、いそしく事へまつらむ人は、其の事へまつれらむさまのまにま品々讚め給ひ上げ給ひ、治め給はむものぞと詔り給ふ天皇が大命を、諸聞こしめさへと宣る。

四、天孫降臨

(古事記)

天照大御神の命もちて、豊葦原千秋長五百秋水穗の國は、あが御子、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國と、ことよざし給ひて、天降したまひき。こゝに天忍穗耳命、天の浮橋にたゞして、のりたまはく、豊葦原千秋長五百秋水穗國は、いたくさやぎてありけりと、のりたまひて、更にかへり上らして、天照大御神に申し給ひき。かれ高御産巢日神、天照大御神の命もちて、天の安河に、八百萬の神を神集へに集へて、思金神に思はしめて、のりたまはく、此の葦原の中つ國は、我が御子のしらすむ國とことよざしたまへる國なり。かれ

この國にちはやぶる荒振る國つ神ども、さはなるとおもほすは、何れの神を遣はしてか、ことむけましとのりたまひき。こゝに思金神、また八百萬の神たち、議りて、天菩比神、これ遣はしてむ。と申しき。かれ天菩比神を遣はしつれば、やがて大國主命にこびつきて、三年になるまで、かへりごと申さざりき。

こゝをもて、高御産巢日神、天照大御神、また諸の神等に問ひたまはく、葦原の中國につかはせる天菩比神、久しくかへりごと申さず、また何れの神をつかはしてえけむ。こゝに思金神申しけらく、天津國玉神の子、天若日子をつかはしてむ。と申しき。かれこゝに、天のまかご弓矢のはゞ矢を天若日子に賜ひて、つかはしき。こゝに天若日子、其の國に降りつきて、即ち大國主神の女、下照比賣を妻とし、また其の國をえむとおもひはかりて、八年になるまでかへりごと申さざりき。

かれこゝに、天照大御神、高御産巢日神、また諸の神等に問ひたまはく、天若日子、久しくかへりごと申さず、又いづれの神をつかはしてか、天若日子が、ひさしく留まるゆゑを問はしめむと問ひたまひき。こゝにもろもろの神等、また思金神をさく、雉名鳴女を遣はしてむ。と申す時に、のりたまはく、汝ゆきて天若日子に問はむさまは、汝を葦原中國に遣はせるゆゑは、其の國のあらぶる神どもを、ことむけやはせとなり。など八年になるまで、

かへりごと申さる」と問へ。とのりたまひき。かれこゝに名鳴女天より降りつきて、天若日子が門なる湯津楓の上にて、まつぶさに天神の天命のごとのりき。こゝに天の佐具賣、此の鳥のいふことを聞きて、天若日子に、此の鳥はなく聲いとあし。かれ射殺し給ひね。といひすゝむれば、即ち天若日子、天神の賜へる、天のはじ弓、矢のかぐ矢をもちて、この雉を射殺しつ。こゝにその矢、雉のむねより通りて、さかさまに射あげらえて、天の安河の河原にまします天照大御神、高木神のみもとにいたりき。この高木神は、高御産巢日神のまたの御名なり。かれ高木神、其の矢をとらして見そなはずれば、其の矢の羽に血つきたりき。こゝに高木神、此の矢は天若日子に賜へりし矢ぞかし。とのりたまひて、もろくの神等に見せて、のりたまへらくは、もし天若日子、命をたがへず、あらぶる神を射たりし矢の來つるならば、天若日子にあたらざれ、もしきたなき心あらば、天若日子、此の矢にまがれ。とのりたまひて、其の矢をとらして、其の矢の穴より、衝きかへしたまひしかば、天若日子が、胡床にねたる高胸坂に中りて、みうせにき。また其の雉かへらず。かれ今に諺に、雉のひたづかひといふもとこれなり。

かれ天若日子が妻、下照比賣のなかせる聲、風のみたひゞきて、天に到りき。こゝに天なる天若日子が父、天津國玉神、また其の妻子どもきして、降りきて、なきかなしみて、乃ちそ

こに喪屋を作りて、河雁をささりもちとし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を確女とし、雉を哭女とし、かく行ひさだめて、日八日、夜八夜を、あそびたりき。此の時、阿遲志貴高日子根神來まして、天若日子が喪を吊ひたまふ時に、天より降りきつる天若日子が父、また其の妻皆なきて、あが子は死なずてありけり。あが君はしなずてましけり。といひて、手足に取り懸りて、なき悲しみき。そのあやまてる故は、此の二柱の神の容姿いとよく似たり。かれこゝをもて過てるなりけり。こゝに阿遲志貴高日子根神、いたく怒りていひけらく、「あはうるはしき友なれこそ、弔らひきつれ。何とかもあれをきたなき死人になぞふる」といひて、御佩かせる十掬劍をぬきて、其の喪屋をきりふせ、足もてくゑはなちやりき。こゝは美濃國の藍見河の河上なる喪山といふ山なり。其のもちてされる大刀の名は大量といふ。またの名は神度劍ともいふ。かれ阿治志貴高日子根神は、おもほてりて飛び去りたまふときに、其のいろも高比賣命、其の御名を顯はさむと思ひて、うたひけらく、

あめなるや、おとたなばたの、うながせる、珠のみすまる、みすまるに、あなだまはや、みたにふたわたらす、あぢしきたかひ、こねのかみぞや。

この歌は夷ぶりなり。

こゝに天照大御神の詔りたまはく、またいづれの神をつかはしてばえけむ。かれ思金

神またもろくの神等申しけらく、天の安河の河上の天石屋にます、名は伊都の尾羽張神、これ遣はすべし。もしまた此の神ならずば、其の神の子建御雷之男神、これつかはすべし。また其の天尾羽張神は天の安河の水を逆さまにせきあげて道をせきをれば、他神はえ行かじ。かれことに、天迦久神を遣はして問ふべしと申しき。かれこゝに天迦久神をつかはして、天尾羽張神に問ふ時に、かしこし仕へまつらむ。然れども此の道には、あが子建御雷神をつかはすべしとまをして、乃ちたてまつりき。かれ天鳥船神を、建御雷神に副へて遣はしき。

こゝをもて、此の二柱の神出雲國の伊那佐の小濱にくだりつきて、十掬劍を抜きて、浪の穂にさかさまに刺したて、其の劍のさきに踏み居て、其の大國主神に問ひたまはく、「天照大御神、高木神の命もちて、問ひにつかはせり。ながうしはける葦原の中國は、あが御子のしらすむ國と、ことよさしたまへり。かれなが心いかにぞ」と問ひたまふときに、答へまつらく、あはえ申さじ。あが子八重言代主神、これ白すべきを、鳥の遊すなどりしに、御穂の前に往きて、いまだ還り來ず」と申しき。かれこゝに、天鳥船神をつかはして、八重言代主神をめし來て問ひたまふときに、其の父の大神に、かしこし。此の國は、天神の御子に奉りたまへ。といひて、即ち其の船をふみかたぶけて、天の逆手を青柴垣に打ちなして、隠りま

しき。かれこゝに、其の大國主神にとひ給はく、今なが子事代主神、かく申しぬ。また白すべき子ありや」と問ひ給ひき。こゝにまた白しつらく、またあが子建御名方神あり。之をおきてはなし。かく白したまふ折しも、其の建御名方神千引石を手末にさゝげて來て、誰れぞ、我が國に來て、忍びくかく物言ふ。然らば力くらべせむ。かれあれ先づ其の御手を取らむ。といふ。かれ其の御手を取らしむれば、即ち立氷にとりなし。また劍刃に取りなし。つかれ懼れて退き居り。こゝに其の建御名方神の手を取らむと、乞ひかへして取れば、若葦を取るがごとつかみひしぎて投げ離ち給へば、即ち逃げいにき。かれ追ひ往きて、科野國の洲羽の海にせめ到りて、殺さむとしまたふ時に、建御名方神白しつらく、かしこし、あをな殺したまひそ。此のところをおきては、あだしところをえゆかじ。またあが父大國主神の命に違はじ。八重言代主神の言に違はじ。此の葦原の中國は、天神の御子の命のまに奉らむと申したまひき。

かれ更にまたかへり來て、其の大國主神に問ひ給はく、なが子ども、事代主神、建御名方神二神は、天つ神の御子の命のまに違はじとまをしぬ。かれなが心如何にぞ」と問ひ給ひき。こゝに答へまつらく、あが子ども二神の白せるまに、あれも違はじ。この葦原の中國は、命のまに既に獻らむ。唯あがすみかをば、天つ神の御子の天津日繼しろし

めさむ、とだる天の御巢なして、底津石根に宮柱太知り、高天の原に氷木高知りて治め給は、あは百足らず、八十隈手に隠りて侍ひなむ。またあが子ども、百八十神は、八重言代主神、神の御尾前となりて仕へまつらば、違ふ神はあらじ。かく白して乃ち隠りましくさ。

五、倭建命

(古事記)

かれ尾張國に到りまして、尾張國の造の祖美夜受比賣の家に入りましき。乃ちめさむとおもほし、かども亦還り上りたらむときにこそめさめとおもほして、ちぎりおきて、東の國にいでまして、山河のあらぶる神またまつろはぬ人どもを、ことごとくにことむけやはしたまひき。かれこゝに相武國に到りませる時に、其の國の造、詐りまをさく、此の野のうちは大沼あり。此の沼の中に住める神、いたくちはやぶる神なり。と白す。こゝに其の神を見そなはしに、其の野に入りましつれば、其の國の造、其の野に火をなもつけたりける。かれあざむかえぬとしろしめして、かの御姨倭比賣命の賜へる御囊の口を解きあけて見たまへば、其のうちに火打ぞありける。こゝにまづ其の御はかしもて、草を茹りはらひ、其の火打をもちて、火をうちいで、向ひ火をつけて、焼きそけて、かへりいでまして、其の國造どもを、皆切り滅し、即ち火をつけて、焼きたまひき。かれ今に焼津とぞいふ。

それより入りいでまして、走水の海を渡りますときに、其の渡の神、浪を立て、御船たゆたひて、えすみ渡りまさず。こゝに其の後御名は弟橘比賣命白したまはく、あれ御子にかはりて海に入りなむ。御子はまけの政とげて、かへりごと奏したまふべし。と白して海に入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、繩疊八重を波の上に敷きて、其の上におりましき。こゝに其の荒浪おのづからなきて、御船を進みき。かれ其の後の謠はせる歌。
さねさしさがむのをぬにもゆる火の火中にたちて、とひし君はも。

かれ七日ありて後に、其の後の御櫛海邊によりたりき。乃ち其の御櫛を取りて御陵を作りて納めおきし。

それより入りいでまして、ことごとくに荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山河のあらぶる神どもをやはして、還り上りますときに、足柄の坂本に到りまして、御糧きこしめすところ、其の坂の神、白き鹿になりて來立ちき。かれ其の御をしの残りの蒜の片端もて、待ちうち給ひしかば、其の目に中りて打殺さえたりき。かれ其の坂に上りたちて、ねもごろに歎かして、あづまはやとのりたまひき。かれ其の國を阿豆麻とはいふなり。

即ち其の國より越えて、甲斐にいて、酒折の宮にましくけるときに、うたひたまは
即自其國越、田甲斐、坐酒折宮、之時歌曰、

にひばり、つくばをすぎで、いくよかねつる。
通比婆理都久波須疑且伊久用加泥都流
 こゝに其の御火たきのおきな御歌をつぎて、
爾其御火燒之老人、
 かいなべて、よにはこのよ、日には十日を。
迦賀那倍且、用通波許能用、比通波登衰迦衰
 とぞうたひける。こゝをもて其の老翁を譽めて、東國の造にぞなしたまひける。其の國よ
是以
 り科野國に越えまして、科野の坂の神をことむけて、尾張國に還りまして、先に契りおか
越科野國乃言尙科野之坂神而
 し、美夜受比賣の許に入りましつ。
美夜受比賣之許
給東國造也
自其國
還來尾張國入坐先日所期

六、意字郡

(出雲風土記)

意字と名づくる所以は國引きませる八束水臣津野命の詔り給はく、八雲たつ出雲の
 國は、狹布の稚國なるかも、はつ國小さく作らせり。故れ作り縫はむと詔り給ひて、栲衾新
 羅の三埼を、國のあまり有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童女の胸鈕取らし
 て、大魚のきだつき別けて、旗すゝきはふりわけて、三つよりの綱打ちかけて、霜つゞらへ
 なく、に、河船のもそろく、に、國來國來と引き來縫へる國は、去豆のうちたえよりして
 やほに杵築の岬なり。かくて堅め立てしかしは、石見の國と出雲の國との界なる。名はさ
 ひめ山是なり。又持ち引ける綱は、齒長濱これなり。また北門佐伎の國を、國のあまり有り

やと見れば、國のあまりありと詔り給ひて、童女の胸鈕とらして、大魚のきだつき別けて、
 はたすゝきはふり別けて、三つよりの綱打ちかけて、霜つゞらへなく、に、河船のもそろ
 く、に、國來國來と引き來縫へる國は、多久の打絶よりして、狹田の國これなり。また北門
 意支の國を、國のあまり有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童女の胸鈕とらし
 て、大魚のきだつきわけて、旗すゝきはふり別けて、三つよりの綱打ちかけて、霜つゞらへ
 なく、に、河船のもそろく、に、國來國來とひき來縫へる國は、手結のうちたえよりして
 開見の國これなり。また越の都々の岬を、國の餘りありやと見れば、國のあまりありと詔
 り給ひて、童女の胸すきとらして、大魚のきだつき別けて、旗すゝきはふり別けて、三つよ
 りの綱打ちかけて、霜葛くるやく、に、河船のもそろく、に、國來國來と引き來縫へる國は
 三穗の埼なり。持ち引ける綱は、夜見島これなり。堅め立てしかしは、伯耆の國なる、大神の
 岳これなり。今は國引き終へぬと詔り給ひて、意字の森に御杖つまたて、おゑと詔り給
 ひき。かれ意字といふ。

七、上古の歌

(萬葉集)

慕振勇士之名歌

大伴家持

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美已等於保呂可爾情盡而念良牟其子奈禮夜母
大夫夜無奈之久可在梓弓須惠布理於許之投矢毛知千尋射和多之劍刀許思爾等理波伎
安之比奇能八峰布美越左之麻久流情不障後代乃可多利都具部久名乎多都倍志母

反歌

丈夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都我爾

幸于紀伊國時歌

若浦爾鹽滿來者渴乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡

山部赤人

須美禮歌

春野爾須美禮探爾等來師吾曾野乎奈都可之美一夜宿二來

沈痾之時歌

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

山上憶良

思子等歌

銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜母

過近江荒都時歌

玉手次畝火之山之檀原乃日知之御世從阿禮座師神之盡樛木乃彌繼嗣爾天下所知食之

柿本人麿

乎天爾滿倭乎置而青丹吉平山乎越何方御念食可天離夷者雖有石走淡海國乃樂浪乃大
津宮爾天下所知食兼天皇之神之御言能大宮者此間等雖聞大殿者此間等雖云春草之茂
生有霞立春日之霧流百磯城之大宮處見者悲毛

反歌

樂浪之思賀乃幸崎雖幸有大宮人之船麻知兼津

左散難彌乃志我能大和太與械六友昔人二亦母相目八毛

羈旅歌

天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見

(二) 中古文例

一、交野の狩

(伊勢物語)

むかし惟喬のみこと申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には其の宮へなんおはしましける。その時右の馬のかみなりける人を常にゐておはしましけり。時世経て久しくなりにければ其の人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせて酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。

今狩する交野の渚の院の櫻殊に面白し。其の木のもとにおりゐて枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬のかみなる人のよめる、

世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし

となんよみたりける。又人のうた、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、うき世に何か久しかるべき

とて、其の木のもとに立ちて歸るに日暮になりぬ。

御供なる人酒を持たせて野より出できたり、此の酒を飲みてんとてよき所を求め行

くに、天の河といふ所にいたりぬ。皇子に馬のみ大みきまゐる。みこののたまひける。

「交野を狩りて天の河のほとりに至るを題にて、歌よみて、盃はさせ、とのたまひければ詠みて奉りける。

狩り暮したなばたつめに宿からん天の河原に我はきにけり

と聞えければ、此の歌をみこかへす。ずし給ひて返しえしたまはず。紀の有常御供につかうまつれり。それがかへし、

一とせにひとたび來ます君待てば宿かす人もあらじとぞおもふ

歸りて宮に入らせたまひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、あるじの皇子酔ひて入り給ひなんとす。十一日の月もかくれなんとすれば、かの馬のかみのよめる、

あかなくにまだきも月のかくるかな山のはにげて入れずもあらなん

皇子にかはりたてまつりて紀の有常

おしなべて峯もたひらになりななん山のはなくば月もかくれじ

二、藤のかげ

(伊勢物語)

むかし左兵衛督なりける在原の行平といふ人ありけり。其の人の家によき酒ありと

さして、上にありける人々飲まんとして来りけり。左中辨藤原の良近といふ人をなんまらうどざねにて、其の日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて瓶に花をさせり。其の花の中にあやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなんありける。それを題にて歌よむ。よみはてがたにあるじのはらからなる。あるじまうけし給ふと聞きて来りければとらへて詠ませける。もとより歌の事はしらざりければ、すまひけれどしひてよませければかくなん。

咲く花のしたに隠るゝ人多みありしにまさる藤の蔭かも

「などかくよむ」と言ひければおほきおととの榮花の盛にみまそかりて藤氏の殊に榮ゆるを思ひてよめる」となんいひける。みな人そしらずなりにけり。

三、月の都

(竹取物語)

三とせばかりありて、春の初よりかくや姫月の面白う出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、月のかほ見るは忌む事と制しけれども、兎もすれば人まには月を見ていみじく泣き給ふ。よづきの望の月に出居て、せちに物思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かくや姫例も月をあはれがり給ひけれども、此

の頃となりてはたゞごとにもあらざめり。いみじくおぼし敷く事あるべし。よく見奉らせ給へ」と言ふを聞きて、かくや姫にいふやう、なぐ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に」と言ふ。かくやひめ、月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なぐ物をか敷き侍るべき」といふ。かくや姫のある所に至りてみれば、猶物おもへるけしきなり。是を見て、あが佛、なに事を思ひ給ふぞ、おぼすらむこと何事ぞ」といへば、思ふ事もなし、物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁、月を見給ひそ。是を見給へば物おぼすけしきはあるぞ」といへば、いかでか月見ずてはあらむ。とて猶月出づれば出居つゝなげきおもへり。夕闇には物おもはぬけしきなり。月のほどになりぬれば、猶時々は打なげき泣きなどす。是をつかふものども、猶物おぼす事有るべし」とさゝやけど、親をはじめて何事ともしらず。はづき望ばかりの月に出居て、かくや姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。是を見て親ども、何事ぞ」と問ひさわぐ。かくや姫なく、いふ、さきくもせうさむと思ひしかども、かならず心惑はし給はむ物ぞと思ひて、今まですぐし侍りつるなり。さのみやはとてうち出て侍りぬるぞ。おのが身は此の國の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、此の世界にはまうできたりける。今は歸るべきになりにければ、この月のもちに彼のもとの國よりむかへに人々

まうでこむず。さらばまかりぬべければ、おぼし歎かむが悲しき事を、此の春より思ひなげき侍るなり。といひて、いみじく泣く。翁、こはなでふ事をの給ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、榮たねの大きさはせしを、我たけだちならぶまで養ひ奉りたるわが子を、なに人かむかへきこえむ。まさにはゆるさむや。といひて、われこそ死なめ。とて泣きのしる事いと堪へがたげなり。かくや姫のいはく、月の都の人にて父母あり。片時のまて彼の國よりまうでこしかども、かく此の國にはあまたの年を経ぬるになむ有りける。彼の國のちゝはゝの事もおぼえず、こゝにはかく久しくあそびきこえてならひ奉れば、いみじからむ心地もせず、悲しくのみなんある。されど、おのが心ならずまかりなむとする。といひて、諸共にいみじうなく。つかはるゝ人々も年頃ならひて、立別れなむ事を、心ばへなどあてやかに美しくしかりつる事を見ならひて、戀しからむ事の堪へがたく、湯水ものまれず、おなじ心になげかしかりけり。

四、みやこいり

(土佐日記)

十六日、けふの夕つかた京へのぼるついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、まがりのほらのかたも形變らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へゆくに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。立ちてゆきし時よりはくる時ぞ人は兎角ありける。これにもそれにもかへりごとす。夜になして京にはいらんと思へば、いそぎしもせぬほどに、月いでぬ。桂川月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川飛鳥川にもあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり。といひて、ある人のよめるうた、
久方の月におひたる桂川そこなるかげもかはらざりけり
またある人のいへる、

天雲のはるかなりつる桂川袖をひでゝもわたりぬるかな
またある人よめる、

桂川わが心にもかよはねど同じ深さにながるべうなり
京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけてくれば、ところくも見えす。京に入りたちてうれし。家にいたりて門にいるに、月あかければいとよくありさま見ゆ。聞きしよりもましていふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を預けたりつる人の心もあれたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さればたよりごとく物もたえず得させたり。今宵かゝる事とこわだかにももの言はず、いとつらく見ゆれど、心ざしはせんとす。さて池めいて窪まりて水づける所あり。ほとりに松もあ

りき、五年六年のうちに千年やすぎにけん。片枝はなくなりけり。いま生ひたるぞまじれる。おほかた皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひいでぬ事なく戀しきがうちに、この家にて生れし女子の諸共にかへらねば、いかゞはかなしき。舟人もみな子いだきてのゝしる。かゝるうちになほかなしみに堪へずして、ひそかに心しれる人いへりけるうた、

生れしも歸らぬものを我宿に小松のあるを見るがかなしさとぞいへる。猶あかずやあらん、またなん、

見し人を松の千歳にみましかば遠く悲しきわかれせましや忘れがたく、くちをしきこと多かれどえつくさず。

五、小柴垣

(源氏物語)

日もいと長きにつれ、なれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。人々は歸し給ひて、惟光ばかり御供にてのぞき給へば、たゞこの西もてにしも持佛すゑ奉りて、行ふ尼なりけり。簾すこしあげて花たてまつるめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に經を置きて、いと惱ましげに讀みゐたる尼上、たゞ人と見え、四

十餘ばかりにていと白くあてに、瘦せたれどつらつきふくらかに、まみのほど、髪かみの美しげにそがれたる末も、なか／＼長きよりもこよなう今めかしきものかなと、あはれに見給ふ。清げなるおとな二人ばかり、さては童部わらべを出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらんと見えて、白しろき衣きぬやまぶきなどの馴れたる着て走り來たる女子、あまた見えつる子供に似るべくもあらず。いみじう生なま先まへみえて、美しげなる形なり。髪は扇あふぎを廣げたるやうにゆる／＼として、顔はいと赤く摺りなして立てり。

何事ぞや、童部と腹だち給へるかとして、尼上の見上げたるに、少しおぼえたる處あれば、子なめりと見給ふ。

雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠ふせの中に籠めたりつるものをとて、いとくちをしと思へり。その居たるおとな、例の心なしのかゝるわざをして、さいなまるゝこそいと心づきなけれ。何方へまかりぬる。いとをかしうやう／＼なりつるものを、鳥などもこそ見つけ、くれとて、立ちてゆく。髪ゆるらかにいと長く、めやすき人なり。少納言の乳母ちのちとぞ人いふめるは、この子の後見うしろみなるべし。

尼君いであなをさなや。いふかひなう物し給ふかな。おのがかく今日明日けふあすになりぬる命をば、何とも思ひたらで、雀慕すずめひ給ふほどよ。罪得る事ぞと、常に聞ゆるを、心うくとて、

ちやと言へば、つゝいゝたり。

つらつきいとらふたげにて、眉のわたり打ちけぶり、いわけなくかゝりたる額つき髪ざし、いみじう美し。ねびゆかん様ゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは限りなく心を盡し聞ゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるゝなりけりと思ふにも、涙ぞ落つる。

尼君髪をかきなでつゝ、梳る事をもうるさがり給へど、をかしの御ぐしや、いとほかなう物し給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを。故姫君は十二にて殿におくれ給ひしほど、いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。たゞ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはさんとすらんとて、いみじく泣くを見給ふもすゞろに悲し。(若紫)

六、須磨のわびずまひ

(源氏物語)

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の關ふきこゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近くきこえて、またなく哀なるものは、かゝるところの秋なりけり。御前にいと人づくなにて、うち息みわたれるに、一人目をさまして、枕を敬てて、四方の嵐を聞きたまふに、浪たゞこゝもとにたちくるこゝちして、涙おつとも覺えぬに、枕うくばかりになりけり。琴を少しかさならしたまへるが、われながらいとすごうきこゆれば、ひきさしたまひて、

こひわびてなく音にまがふ浦波は、思ふ方より風やふくらむ。とうたひたまへるに、人々おどろきて、めてたう覺ゆるに、しのばれて、あいなう起きぬつ、涙をしのびやかにみわたす。げにいかにも思ふらむ。わが身一により、親はらから片時たちはなれがたく、程につけつゝ、思ふらむ。家を別れて、かく惑ひあへると、おぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれ

言うちのたまひ紛らし、徒然なるまゝに、いろ／＼の紙をつぎつゝ、手習をしたまひ、珍らしき様なる唐の綾などに、様々の繪どもをかきすさびたまへる。屏風のおもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人々の語りきこえし海山の有様を、遙かにおぼしやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なくかさ集めたまへり。この頃の上手にすめる千枝、常則などをめして、作繪つかうまつらせばやと、心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に、世の物おもひ忘れて、近うなれつかうまつるをうれしきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ／＼さき亂れ、おもしろき夕暮に、海みやらるゝ廊に出でたまひて、佇みたまふ御様の、ゆゝしう清らなること、所がらは、ましてこ

の世のものとも見えたまはず。白き綾のなよやかなる。紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく、うち亂れたまへる御様に、釋迦牟尼佛弟子となのりて、ゆるゝかにもみたまへる、また世にしらずきこゆ。沖より舟どものうたひの、しりて漕ぎゆくなどもきこゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも、心細げなるに、雁の列ねてなく、聲、楫の音にまがへるを、うちながめたまひて、御涙のこぼるるを、かきはらひたまへる御手つき、黒木の御數珠にはえたまへるは、………人々のこゝちみな慰みにけり。

月のいと花やかにさし出でたるに、今夜は十五夜なりけりとおぼし出で、殿上の御遊こひしく、所々ながめ給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。二千里外故人心と誦し給へる例の涙もとゞめられず。(須磨)

七、翁丸

(枕草紙)

うへに侍ふ御猫は、かうぶり給はりて命婦のおもとして、いとをかしければ、寵かせ給ふが端に出でたるを、乳母の馬の命婦あなまसानや、入り給へ」とよぶに、聞かて、日のさしあたりたるにうち眠りてゐたるを、おどすとて、翁丸いづら、命婦のおもと食へといふに、

まことかとして、しれもの走りかゝりたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間にうへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御懐に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆まゐりたるに、この翁丸打ち調じて、犬鳥につかはせ。只今と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、乳母かへてん、いとうしろめたし。と仰せらるれば、かしてまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを、三月三日に、頭の辨柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしをり、かゝる目見んと思ひかけけんや」とあはれがる。御膳のをりは、必ずむかひさぶらふに、さうざうしくこそあれなどいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、何ぞの犬のかく久しくなくにかあらんと聞くに、よろづの犬ども走り騒ぎとぶらひに行く。御側人なるもの走り來て、あないみじ、犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸りまゐりたるとて、調じたまふといふ。心うのことや、翁丸なり。忠隆實房なん打つ。といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。死にければ、門の外にひき棄てつ。といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるがわなきありければ、あはれ丸か、かゝる犬はやこのごろは見ゆる。などいふに、翁丸と呼べど耳にも聞き

入れず。それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、右近ぞ見知りたる、呼べ。とて、下なるを、まづとみのこと。とて召せば、参りたり。これは翁丸か。と見せ給ふに、似て侍れども、これはゆゑしげにこそ侍るめれ。また翁丸と呼ばば、悦びてまうて來るものを、呼べど寄りこず、あらぬなめり。これは打ち殺して、棄てはべりぬとこそ申しつれ。さるものどもの二人して、打たんには、生きなんや。と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる。つとめて、御梳櫛にまゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるを、あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけんこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらん。いかにわびしき心地しけん。とうちいふほどに、この寝たる犬ふるひわなゝきて、涙をただ落しにおとす。いとあさまし。さはこれ翁丸にこそありけり。よべは隠れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきことかぎりなし。御鏡をもちあきて、さは翁丸といふに、ひれ伏していみじくなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々まゐり集りて、右近内侍召して、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、あさましう犬などもかゝる心あるものなりけりと笑はせ給ふ。うへの女房たちなども來りまゐり集りて呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れなめり。物調せさせばや。といへば、つひにいひあらはしつる。など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたより、まことにや待らん、かれ見侍らん。といひたれば、あなゆゑし、さる者なし。といはすれば、さりととも終に見つくる折も侍らん。さのみもえかくさせ給はじ。といふなり。さて後、畏り勤事許されて、もとのやうになりき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ、世に知らずをかしく哀れなりしか。人々にもいはれて泣きなどす。

八、うつくしき物

(枕草紙)

瓜にかきたる兒の顔。雀の子のねずなきするに躍りくる。また紅などつけてすゑたれば、親雀の蟲などもてきてくゝむるも、いとらうたし。三ばかりなる兒の、急ぎてはひくる道に、いと小さき塵などのありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髪の覆ひたるを、かきはやらで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。手纏がけにゆひたる腰の上の白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、さうぞきたてられてありくも、うつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむほどに、かいつきて寐入りたるも、らうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さきを、池よりとりあげて見る。葵の小さきも、い

とうつくし。何もくいと小さき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる兒の二ばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の薄物など衣長くて、手纏あげたるが、はひいでくるも、いとうつくし。八、九、十ばかりなる男兒の、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鶏の雛の、脚高に、白うをかしげに、衣短かなる様して、ひよくとかしがましくなきて、人の後にたちてありくも、また親のもとにつれだちありく見るも、うつくし。鴨の卵、舍利の壺、撫子の花。

九、源氏物語

(更科日記)

(上略)かくのみ思ひくんじたるを、心もなぐさめんと心苦しがりて、母物がたりなど求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見つゝ、つづきのみまほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。さればいまだみやこなれぬほどにてえみつけず、いみじく心もとなくゆかしくおぼゆるまゝに、この源氏の物語一の巻よりして、みな見せたまへと、心のうちにいのる。親の太秦にこもりたまへるにも、こと事なく此ことを申し出て出でむまゝに、此物語みはてんとおもへど見えず。いと口惜しく思へなげかるゝに、をばなる人の、おなかよりのぼりたる所にわたいたれば、いとうつくしうおひなりにけり。など、あはれがり珍しがりて、歸るに、なにをか奉らむ、まめくしきものはまさなかりな

ん、ゆかしくしたまふなるものをたてまつらんとて、源氏の五拾餘巻櫃に入りながら、在中將とほきみを、り河、しらゝ、あさうづ、などいふ物がたりども、ひとふくろとり入れてえてかへる心地のうれしさぞいみじきや。車中なりはしるゝわづかにみつゝ、心もえず心もとなくおもひ、源氏を一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちに打伏して、ひきいてつゝみる心ち、后のくらゐもなにかはせん。ひるは日ぐらしよるは、めのさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るより外のことなければ、おのづから名などはそらにおぼえうかぶを、いみじきことに思ふ。

夢にいとさよげなる僧の、黄なる地の袈裟けさきたるがきて、法華經五卷をとくならへといふ。とみれど人にも語らず、習はんとおもひかけず。物語の事をのみ心にしめて、われは此ごろわろきぞかし。さかりにならばかたちもかぎりなくよく、かみもいみじくながくなりなん。ひかる源氏の夕かほ、宇治の大將のうき舟の女ぎみのやうにこそあらめ、とおもひける心、まづいとほかなくあさまし。

十、法成寺の造營

(榮花物語)

(上略)今は御心地、例ざまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事思しいそがせ給ふ。頼政

殿國々まで、さるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂の事を、先につかまつるべき仰事の給ふ。殿道長の御前もこの度生きたるは別事ならずこの願の叶ふべきなめりとの給はせて、他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて、大垣にして瓦葺きたり。様々に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心もとなく、日の暮るゝも口をしうおぼされて、夜もすがらは山をたゝむべきやう、池を堀るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂御堂方々様々つくりつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を數もしらず造りなべ、そなたをば北南と馬道をあけて、道を整へつくらせ給ひて、廊渡殿かず多く作らせ補んなどおぼし給ふに、鶏の鳴くも久しくおぼされ宵曉の御行もおこたらず、安きいも大とのごもらず。ただこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。日々多くの人々参りまかで立ちこむ。さるべき殿ばらをはじめ奉りて、宮々の御封御庄どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことにおぼしたり。國々の守ども、地子、官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役材木、檜皮瓦など、多く参らする事を、我もくゝと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品々方々、あたりくゝにつかうまつる。

或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみゐて仕うまつる。同じくはこれこそめてたけれと見ゆ。御堂の内を見上ぐれば、匠工ども二三百人のぼり居て、大きな木どもには、太き綱をつけて、聲を合せて、えさまさと引き上げさわぐ。御堂の内を見れば、佛の御座つくりかゞやかす。板敷を見れば、木賊椋の葉などして、四五十人手ごとになみゐて磨き拭ふ。檜皮葺壁塗、瓦作なども、數をつくしたり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心に任せて切りとゝのふるものあり。池を堀るとして、四五百人おりたち、山を疊むとて、五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつけて叫びのゝしり引きもてのぼる。鴨河の方を見れば、筏といふものに、搏材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひのゝしりもてのぼるめり。大津むめづの心地するも、西は東といふ事はこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れどしづまず。すべていろくゝ様々言ひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけんも、かくやありけんと思ゆるを、冬の室、夏の風、各々ことくゝなり。

かゝる御勢にそへて、入道させ給ひて後は、いとゞ勝らせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人はたふとみ、遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今はこの御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そなた

さまに趣けば、海の浪も柔かにたちて、この御堂の物を持って運ばせ、河も水すみて快く浮べもて参るとみゆ。猶なべてこの世の事とは見えさせたまはず。まづは先年に長谷寺にある僧の御祈禱をいみじうして、寝たりける夢に、大にいかめしき男の出で来て、「何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ、弘法大師の佛法興隆のために、生れ給へるなり。」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖徳太子の御日記には、「王城より東に佛法弘めん人を、我と知れ。」とこそは書き置かせ給ふなれ。いづれにてもあるかならぬ御事なり。(うたがひ)

十一、藤原隆家

(大鏡)

此^{伊周}帥殿の御一ッ腹の十七にて、中納言になりなどして、世の中のさがなものといはれたまひし殿^{隆家}の御童名は阿古君ぞかし。此の兄殿の御のしりにかゝりて、出雲の權守になりて、但馬にこそおはせしが、帥殿のかへり給ひしをり、此の殿のぼりたまひて、もとの中納言になりてまた兵部卿などこそはきこえさせしが、それもいみじうたましひおはすとぞ、世人におもはれ給へりし。あまたの人々の下薦になりて、かた^くすさまじくおぼされながら、さりとてやはとてありかせ給ふに、御賀茂詣につかまつりたまへるに、むげにくだりておはするがいとほしくて、殿^{道長}の御車にのせ奉らせ給ひて、御物語こまやか

なるついでに、ひと^とせの事は、おのれが申行ひたるとぞ世間にはいひ侍りける、そこにもしかぞおぼしけん。されどもさもなかりし事なり。宣旨ならぬ事一言にてもくはへて侍らましかば、此の御社にかくして参りましや。天道も見給ふらんいとおそろしき事とまめやかにのたまはせしなん中々におもておかんかたなくずちなくおぼえしとこそ、後^{隆家}のたまひけれ。それもこの殿におはすれば、さやうにもおほせらるゝにぞ。帥殿にはさまでもやは聞えさせ給ひける。

この中納言殿は、かやうにえさりがたき事のわり^くばかりあるきたまひて、いといにしへのやうにまじらひたまふ事はなかりけるに、入道殿^{道長}の土御門殿にて御遊あるに、かやうの事にこの權中納言のなきこそ猶さう^くしけれ、との給はせてわざと御消息聞えさせ給ふほど、酒杯あまた^くびになりて、人々みだれ給ひて紐おしやりつゝさぶらはるゝに、此の中納言まゐり給へればうるはしくなりて、おなほりなどせられければ殿とかく御ひもとかせ給へ、ことやぶれ侍りぬべし、とおほせられければ、かしこまりて逗留し給ふを、公信卿うしろより、ときたてまつらんとてより給ふに、中納言殿御けしきあしくなりて、隆家は不運なるこそあれ、そこたちにかやうにせらるべき身にもあらずとあらゝかにのたまふに、人々御けしきかはり給へる中にも、今の民部卿殿はうはぐみて、

人々の御顔をとかく見給ひつゝ、こといできなんぞ、いみじきわざかなとおぼしたり。入道殿打笑はせたませて、けふはかやうのたはぶれ事侍らでありなん。道長ときたてまつらんとして、よらせ給ひて、はらくととき奉らせ給ふに、これらこそあるべきことよとして、御けしきなほりてさしおかれつる盃とり給ひて、あまたいびめし、常よりもみだれあそばせ給ひけるさまなどあらまほしくおはしましけり。殿もいみじうもてはやし聞えさせたまひけり。

中等國語概説終

中等國語概說附錄(一)

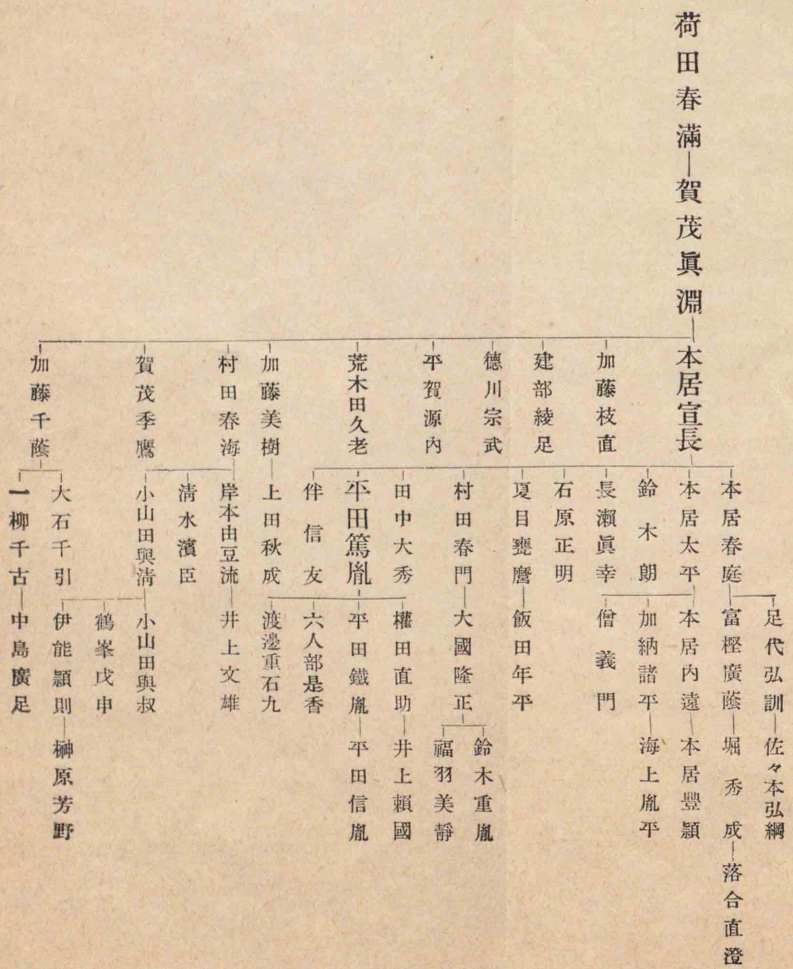
(表覽一史學文國)

	奈良朝以前	上	和歌																	傳 說
1306	奈良朝	古	和歌	長歌 (敍事詩)																風土記 記紀
1454	平安朝	中古	和歌 今樣							雜 日隨文 記筆學										物 語
1845	鎌倉南北朝室町時代	近古	和歌	連歌						雜 史隨文 言論筆學										戰記 文 御伽草子
2258	江戸幕府時代	近世	和歌 狂歌 川柳	俳句 狂文 諧文						淨脚史隨雜 瑠璃本論筆學										草子類 (戲作) 小 說
2528	明治以後	現代	和歌	俳句	新體詩 劇詩					脚評雜翻 本論著譯										少年文學 通俗圖書 傳記講談 御伽噺 小 說

中等國語概說附錄 (二)
 (勅撰和歌集一覽表)

代數	集名	卷數	勅(院)宣	年	代	撰	者
一	古今和歌集	二〇	醍醐	延喜	五	紀貫之、凡河內躬恒、紀友則、壬生忠岑	
二	後撰	二〇	村上	天曆	五	清原元輔、源順、大中臣能宣、紀時文、坂上望城	
三	拾遺	二〇	一條	長德	元	藤原公任?	
四	後拾遺	二〇	白河	應德	三	藤原通俊	
五	金葉	一〇	白河院	大治	二	源俊賴	
六	詞花	一〇	崇徳院	仁平	元	藤原顯輔	
七	千載	二〇	後白河院	文治	三	藤原俊成	
八	新古今	二〇	後鳥羽院	元久	二	藤原定家、家隆、有家、雅經、通具	
九	新勅撰	二〇	後堀河	貞永	二	藤原定家	
一〇	續後撰	二〇	後嵯峨院	建長	三	同爲家	
一一	續古今	二〇	同	文永	二	藤原爲家、基家、行家、光俊	
一二	續拾遺	二〇	龜山院	弘安	二	二條爲氏	
一三	新後撰	二〇	後宇多院	嘉元	元	二條爲世	
一四	玉葉	二〇	伏見院	正和	元	京極爲兼	
一五	續千載	二〇	後宇多院	元應	二	二條爲世	
一六	續後拾遺	二〇	後醍醐	正中	二	二條爲藤、同爲定	
一七	風雅	二〇	花園院	貞和	二	花園院	
一八	新千載	二〇	後光嚴	延文	四	二條爲定	
一九	新拾遺	二〇	同	貞治	三	二條爲明	
二〇	新後拾遺	二〇	後圓融	永德	三	二條爲遠、同爲重	
二一	新續古今	二〇	後花園	永享	十	飛鳥井雅世	

中等國語概說附錄 (三)
 (國學者系統表)



中等國語概說附錄 (五)

(儒家諸學派系統表)

(陽明學) 中江藤樹 熊澤蕃山

(古學) 伊藤仁齋 伊藤東涯 伊藤東所 伊藤東里

伊藤蘭圃 山田麟嶼
並河天民 青木昆陽

鷹見爽鳩 立原翠軒

大內熊年 大內歲室

太宰春臺 太宰徵孺

(古文辭學) 荻生徂徠

荻生道滿 荻生鳳鳴

服部南郭 服部仲英

鶴殿士寧 片山兼山

湯淺常山

山縣周南 瀧鶴臺

龜井南溪 龜井昱

水足屏山 水足博泉

(折衷學)

○中西淡淵 細井平洲 秦鼎

樺島石梁

○井上蘭臺 井上金蛾 山本北山 山中天水 中井敬義

井上南臺 小川泰山 大窪天民

龜田鵬齋 龜田綾瀨

蒲生君平

日尾荊山

芳野金陵

○宇野士新 村瀨栲亭 田能村竹田

片山北海 尾藤二洲

赤松滄洲

大正十三年十月二十五日印刷
大正十三年十月二十八日發行

中等國語概說
定價金參拾五錢
大正十四年度臨時定價金六拾參錢



著者 清永芳德

東京市日本橋區鐵砲町三番地

發行者 合資六盟館

東京市京橋區弓町二十五番地

右代表者 杉本敏治

印刷者 高橋郁

發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資六盟館
電話特長神田一三六四番 振替口座東京一二五五〇番

當館發行各教科書は常に充分なる製本準備仕り居り候に付萬一各地販賣所に賣切等の爲教授上御差支を來し居り候節は直接當館へ御注文被下候はゞ直ちに御送本可申候

